
普通だけど異常で過負荷な俺

牛先輩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通だけど異常で過負荷な俺

【Nコード】

N2602X

【作者名】

牛先輩

【あらすじ】

めだかボックス好きの高校生しょうがくせい白水弓彦みづかゆひこはある日めだかボックスを読んでこう思った。

「寝て起きたらめだかボックスの世界へ行きたい」

そう思い寝て起きたらそこはなにかが違ったそこは……

めだかボックスの世界だった

その世界に迷い込んだ彼の運命は……!!?

タイトル変更しました

第1話 「入っちゃったあ!!!?」 (前書き)

どーも牛先輩です！流星のロックマンの方を読んてる人はすみませ
ん！

どーかこの勝手に文章力無くて原作クラッシャー(?) な作者の作
品ですが

読んでください

第1話 「入っちゃったあ!!!?」

日曜日の夜12時

学校に行くのがだるくなってきた高校一年生です

そんな俺の楽しみは毎週月曜（又は二ヶ月に一回）に訪れる・・・

そう!!!ジャンプだ!!!週刊少年ジャンプだ!!!

そしてその中に載っているマンガ・・・で一番なのは

めだかボックス!!!!!!やつぱりめだかは最高だぜ!

ちなみにそんな俺の名前は白水弓彦しみずゆまひこだぜ

まっそんな俺はめだかボックス4巻を読んだ

そのときの俺の感想は「寝て起きたら最強?すげえっすね(笑)」で
「俺は寝て起きたらめだかボックスの世界へ行きたいよ」なんて

軽く考え

『まあいいや寝よ・・・』

そして俺は寝た・・・そして起きると

なんか・・・いつもと違った

まず制服が違う

この制服は・・・

箱庭学園のだ

第1話 「入っちゃったあ!!!?」 (後書き)

どうでしたか?

流星のロックマンと少し書き方が違うので苦戦しました
感想待ってます!

主人公紹介（前書き）

スキル考えすぎかな？

一応ネタバレにならないようにスキルの名前だけにしときます
というか半分くらい名前しか浮かんでないんですが
スキルは増え続けます

主人公紹介

名前 白水弓彦 しろみずゆみひこ

年齢 15

性別 男

特徴 白髪で球磨川のような顔立ち

血液型 AB型

癖 誰にでも「ちゃん」をつける

異常

「冷たい心」マインドキール不明

「熱い心」マインドヒート不明

「暴力以上の暴力」バイオレンスナックル不明

「無歩」ノーフロン不明

「疲れ知らず」アスリート不明

「半身半技」ハートインクリス不明

「言霊の幸心人々」ことだまのさきはうひとびと不明

過負荷
不明

主人公紹介（後書き）

それにしてもスキル名厨二っぽい・・・

第2話 「Letプライバシー!!!」 (前書き)

新しく始めるやつは話がぽんぽん浮かぶなあ

第2話 「Letプライバシー!!!」

俺は今箱庭学園に向かっている

え？道分かるかって？わかるわけねえだろ（怒）

ちなみに今は5月の後半っばい

俺はおそらく転校生として入れるだろう

たぶん……

そんな訳で学校に……

着いちゃいました！

え？どうやって着いたかって？

だってこの学校広いんだぜ？

こんなマンモス校見つけれないほうが難しいって……

と・こ・ろ・で俺のクラスはどこだ？

どうしよう……

「人吉く〜ん今日こそおごって

「やるか!」「」

こ、このあどけない声は!!!

し、し、し、不知火!!!!!!と・善吉

「ん？今あたしのこと呼んだのあんた？」

『え！？そんなバカな！！なぜ俺の心の声が！？』

「知らな〜い」

「あ、悪いなこいつなんか心読めるっぽいから」

『Letプライバシー！！！！』

「あひゃひゃ」

「転校生？」

『うん（恐怖）』

「へ〜〜、そ〜〜なんだ〜〜〜」

『・・・なんですか？なんなんですか？不知火先生？』

「ここなんか2巻のあそこに似てるな・・・」

「べつにつ〜おじいちゃんに聞いてあげようかって考えてるだけだよ〜ん」

「おじいちゃん？」

あ〜あの袖ちゃんって呼んでたじいさんが

「そうそうそれそれ」

『心を読むなあ————！！！！！！！！！！』

「で？名前は何？」

『白水弓彦』

「つか不知火・・・
人と話すときくらい飯食うのやめてくれ・・・
文章だからわからないけど今も不知火は飯を食ってます

「わかったよ」

『で、どいっ?』

「なにを?」

『はい?』

「なにをおごってくれるの?」

ピキッ

そのとき俺の中の時間が止まった

3秒後

『じゃあセインイレ』の

「売ってる食品全部ね」

は?

再び俺の中の時間が止まった

数分後やっと俺は財布が殉職しない程度に説得した
不知火が電話(メール?)してる間は善吉と話している

「お疲れ・・・あ、俺は人吉善吉だ、よろしくな」

『よろしくよろしく』

「・・・なんで俺への興味はゼロなんだ？」

『俺の男への興味は女子に比べたらゼロに等しいからね』

「ほう（怒）」

『冗談冗談』

「わかったよ」

『で・・・何組？』

「一組だよ」

『一組・・・（イイマル）普通か』

「じゃあ同じクラスだな」

「よろしくねえーと・・・ろ・・・で」

「ん？どうした？』

なぜ息が合ったのだろうか・・・

「今日のお嬢様の就任式だよ」

「あっ」

就任式？

「やべっ！急ぐぞ！」

「えゝ走るの？」

「たりめーだ！」

「おんぶは？」

「するか！...！」

本当仲良すぎて気持ち悪いな・・・

そして体育館

第2話 「Letプライバシー!!!」 (後書き)

不知火のおんぶ要求は

1巻の「走るの嫌い」ってところから思いついたネタです

第3話 「無視しよう!」

『世界は平凡か？』

未来は退屈か？』

現実 is 適当か？』

んゝほとんどあつてるね

どうも皆！ラジオ体操はやらないではんこだけ押す

白水弓彦しみずゆみひこだよ！

さて今の続きをどうぞ！

『安心しろそれでも

生きることは劇的だ!』

そんなのはきれいごとだ!・・・って言う人もいるかもね
あ！俺のこと無視していいからね

『そんなわけで本日より私が貴様たちの生徒会長だ

学業・恋愛・家庭・労働・私生活にいたるまで

悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい

24時間365日

私は誰からの相談でも受け付ける!』

まさに大言壮語・・・って奴かな？

凄いこといっちゃうね

少し時間は飛び 一年一組

「しっかしあのお嬢様

全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ

人前に立つのに慣れてるっつかさー」

「カツ！ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ人の上に立つのに慣れてんだ！」

作者的にめんどいがキャラ紹介

人吉善吉 所属一年一組 利き腕左 血液型A B型 星座しし座

「んゝあー、そりやそーだね、そーでなきや一年生で生徒会長になんかなれっこないか」

不知火半袖 所属一年一組 血液型A B型 視力左右ともに1 / 5

『どんなどんな？』

「うおっ！いつからいたんだよ！転校生！！」

『どやっ』

「どや顔すんな！！」

『で？お嬢様とか生徒会長とかって何？』

「じゃあ説明してやれ不知火」

「あいあいさ〜

全国模試では常に上位をキープ！

偏差値は常識知らずの90を記録し！

手にした賞状やトロフィーは数知れず！

スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！

実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！

全長263・0メートル

高度6万フィートをマッハ2で飛行！

インテル入ってる！」

「いや途中から人類じゃなくなってる」

『ほうほうそれで《ジョニー》はどうなったんだ？』

「え〜とね〜」

「ジョニーって誰だ!？」

「で？理解できた？白水」

『おいおい袖ちゃん名字呼びはねーだろ〜せっかくだしヒコザ
て呼んでよ』

「やだ」

「ポケン!？」

今そこにツッコむか・・・

『じゃあ彦でそれかヒコで』

「OK」

普通だな・・・本当に気分屋だな・・・

『ところで善吉ちゃんが入るの？生徒会』

「カツ！入ってたまるか！あとちゃん付けんな」

・・・・・・善吉ちゃんの後ろに生徒会長黒神めだかがいる

・・・・・・よし！

無視！！！！！！！！

『なんでちゃん付けだめなの？』

「それは・・・」

ま、どーせあいつのことだろうな・・・・・・あの負の^{マイナス}・・・・・・ん？

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

って聞こえるような・・・・・・

「そうか貴様らは私を無視すると・・・・・・ならば！私も貴様らの意見とやらを無視しようか！！」

『「え？」』

ガシッ

あれ？この人こんな性格だっ

『「ギヤアアアアアアアア」』

第4話 「逃げる! ! !」 (前書き)

今回からたまにあらすじを書こうと思います

あらすじ「拉致られた」

ちなみに主人公がいないときはナレーションでお送りします

第4話 「逃げる!!!」

「あれ？人吉と転校生どこ行った？」

「んー人吉達はね？さつきこわーい生徒会長さんに連れてかれちゃっただよん」

今不知火に話しかけたのは日向………日向とは………確か善吉のクラスメイトの………メガネ？だ

「そーいやなんか選挙活動も

手伝ってみたいだけど人吉と例の新会長って
どついう関係なんだ？」

「あーいわゆるひとつの幼なじみって奴ですよ

ま、あたしに言わせりゃただの腐れ縁なんだけどね」

〈生徒会室〉

「………つたく普通に連れてくるってことができねーのかよ、生徒
会長さん」

『いや連れてくるっていうか今の拉致「ふんふん私の誘いを」聞け
！！』

黒神めだか 所属一年十三組 血液型A B型

「それとよそよそしい呼び方をするものではないぞ昔のようにめだ

「かちゃんと呼ぶがよい！」

凜っ！！！

役職 生徒会長

「うわぁ〜本当に凜っ！！って出てる？（聞こえる？）

「カツ！そりゃキツイのはわかるけどな！だからって俺を巻きこむなよ！」

俺も巻き込まれた・・・・・・
っていうかあれ？2人とも俺無視して話すすめてない？

・・・よしっ！！2人で話してる間に・・・

逃げろ！！！！

ダッ！ガシッ

あれ？歩けないぞ？というか足浮かんでない？
よし！も一回見よ

チラッ

足浮いてました。

「おい貴様いつまでとぼけている」

『いやだって普通体重60Kgはあるであろう高1男子の服の襟を

つかんで宙に浮かせるとか高1女子のパワーじゃありませんよ〜』

「む、そうか？」

(すいぶん説明口調だな)

本当に自分が異常てんきだって気づいてないんだね・・・

『ていうか早く降ろしてください』

「ん？すまん」

ドサツ ゴンツ 『ぶっ!!』

痛い！・・・あれ？精一杯痛がつてるのに

無視！？え？なんで痛がつてるかって？

・・・なんでだろ・・・

そのままごちゃごちゃ話して・・・

剣道場にて

第5話 「グッバイ・俺」(前書き)

なんだ！このサブタイトル！！！！？

あらすじ「めだかと呼べ呼んで呼ぶがよい」

第5話 「グッバイ・俺」

バンツ

えー今の音は生徒会長様が剣道場（不良のたまり場）の扉を開けて

バンツ

つて感じですよ

おっと！紹介が遅れたね俺はバカの悪魔！

バカシファ バキツ！

『ひでーよ善吉ちゃん・・・』

「うるせえ！ハ〇ルの動く城じゃねーんだぞ！」

『大丈夫だよ今のじゃわかる人少ないから』

「おい誰だお前ら」

「一年十三組生徒会執行部会長職

黒神めだかだ

目安箱の投書に基づき生徒会を執行する！」

「あー聞いてんぜ今をときめくイカれた新会長って奴だろ？」

うわっ！負けフラグ早速立ってるー！

お？なんかリーダーみたいな人（名前？知らんな）が

会長さんに木刀向けてるよ

「貴様がリーダーの門司三年生だな、剣道か懐かしいぞ、私も昔少

しだけかじつたよ」

にしても上級生になぜ敬語を使わないんだらろう
ん？・・あれ？

「この木刀もよく手入れされておる、黒檀とは随分張り込んだもの
だ」

あれ？なんか会長さんの手にいつの間にか門司（文字？）先輩の木
刀が

『善吉ちゃん何が起こったの？どんな技？』

「無刀取りだ技つつーかフツーに奥義なんだけど」

『へ〜そっか〜』

無刀取りか〜知ってたけど忘れてたぜ

ん？おっ！そろそろあれか？

ズ タタタタタタタタ

キター分身の術ー会長さんが分身して走ってそして気づいたら扇子
の上には

「 それでも煙草だけは控えておけ」

煙草が—————

「 貴様達の健全な 」

『 煙草のせいで体悪くしても知らんぞ————— 』

第6話 「人の〇〇奪うとして」(前書き)

あらすじ」「ご臨終です俺・・・」

さてようやく原作の1話目が終わりそう

第6話 「人の〇〇奪っという」

剣道場の件の翌日、食堂

「彦はともかくさ、人吉ってひよっとして頭悪くない？なんで毎回お嬢様のシゴキに付き合ってるんだよ、部外者のくせに」

「うるせえ」

『そつだぜ袖ちゃんの言う通りだぜ善吉ちゃん』

やあ！前回死にかけて、ある先生に心配（？）された白水弓彦しみずゆみひこだよ

「お前も巻き込まれただろうが！（怒）」

『ちつちやいことは気にすんなよ』

まっ安心しなよ善吉ちゃん』

「は？」

「あれ？知らないの？今日の放課後役員募集すんだよ？一、二年生の特待生集めてね」

まっこの先展開知ってるけどね

にしても飯食ったら眠・・・

そういえばさつき後ろからなんか声聞こえたような

たしか・・・あれ・・・日向か・・・まあいいや教室帰って寝よ

Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z

剣道場

「ったくよく高校じゃいい子ちゃんに通しかつただけだよ」

そこには倒れた不良と日向そして倒れた善吉センバイがいた

「だ・・・誰だお前・・・？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ、真面目に剣道がしたい真面目」
ガラツ（遅れたーーーー！！！！）あ？てめ転校生か？」

あれ？日向？なんで？まさか・・・

「おらあーーーー！！！！」

ぎゃあああああなんかいきなり襲いかかってきたーーーー！！！！

ガツシッ

「！？ひっ・・・人吉！」

「無刀取りとムリっとな・・・たりめーか」

「へっ・・・やっぱお前は妨が助かったよ善吉ちゃん」

「ええいよるな！！ったく何しに来てんだ？」

『いや・・・あの・・・剣道場が気になって・・・（嘘）』

まあ本当は夢を見てたら寝過ごして遅れたんだけど
と！いうわけで回想に入るぜ！

く回想く

あれ？ここは教室？

『あれ？俺寝たよな？』

「うん寝たよ」

そこには箱庭学園とは違った制服を着た女のこがい……この人
「あれ？僕を知ってるの？」

『どうもこんにちわ安心院なじみさん』

「どうして僕のこと知ってるかは聞かないけど、僕の事は安心院あんしんいんさん
と呼びなさい」

『ガチで言うんですねそれ』

「さて言いたい事がたくさんあるけどまずは……」

すると安心院あんしんいんさんが……
なんか一歩一歩近づいてくる

『なにするんですか？(汗)』
「ん？なにって」

『ま、まさか……』

『あのスキル』を使う気じゃ……

（10分後）

『……』

「いつまで落ち込むんだい？」

「めだかボックス」の読者の皆さんならわかるだろう俺のされたことを

「まったく僕は口写しリップサービスを使っただけだよ」

「初めてですよ女の子に殺意持ったの」

「君はどう見ても女の子大好きだろう？ だったらある意味勝ちじゃないか」

「いくらなんでも無理矢理はいやですよ（泣）」

なんかどどんいやなことが暴露されていくような感じが

ん？あれ？よく考えたら口写しリップサービスしてことは

「うんスキルを一個あげたよまあそれでイーブンだろ？」

「まあそうっすね・・・じゃあ何をくれたんですか？」

「スキルを数えるスキルさ」

「・・・はあ？」

「ああごめんごめん正確にはスキルを把握するスキルさ」

「ひ・・・キ・・・それ・・・」

「？どうしたんだい？」

「人のファーストキス奪つといてそれだけかぁー！！！！」

「大丈夫かい？一応隠してたのに暴露してるよ？それにモノローグ忘れてるよ？」

「あっ！」

「まあ貸してあげたから」

『?そんなんスキル持つてなきや意味が

!!!!?』

「やつと実感わいたかい?」

『え?嘘オ.....』

〜回想終わり〜

いやあ〜思い出すと嫌な感じだな

あれ?なんか日向が善吉ちゃんを木刀で叩こうとしてる!?

よーしさつそく『アレ』を試すか!

ちなみにここまでの思考時間30秒(回想含め)

スキル!「バイオレンスナックル暴力以上の暴力」!!

これは自分に暴力的な強さを与えるスキルだ!

「どいつもこいつも面倒くせえ!お前!剣道三倍段って知ってっ

」

ゴッ グワッシャーーーーーンッ

『「知るかつ!」』

善吉ちゃんと俺で日向をぶん殴り

日向は何メートルか吹き飛ば

ん?ずいぶん吹き飛んだな

やりすぎたかな?

なんか横で善吉ちゃんが驚いてるし

.....無視しよう!!!

数日後剣道部（仮）をまとめる日向の姿と
生徒会に入った善吉ちゃんの姿があった

第6話 「人の〇〇奪つといて」(後書き)

まあ主人公が落ち込むのもわからなくもないな
にしてもそこらへんのくだり書いててなんか恥ずしいな

第7話 「ナルシスト!？」 (前書き)

あらすじ「俺のファーストキスが……」

前回の主人公へ

「どんまい!!!!」

第7話 「ナルシスト!？」

やあ！前回チートババアにファーストキスを奪われた白水弓彦しろみづゆみひこだよ！

善吉ちゃんが生徒会に入って一週間が経った

そんなわけで放課後に生徒会に遊びに来ました

ん？あれ善吉ちゃんが鏡で自分の姿を見てる!？

まさか善吉ちゃんは・・・『ナルシスト!？』

「ちげえーよ!!!」

『グハツ』

蹴られた!!ひでえよ善吉ちゃん！

「あ、わりー」

「ま、いいやどしたの?」

「いや俺黒い制服似合わねえじゃん?」

「いや善吉には黒がよく似合う」

いつの間にか俺達の後ろで善吉ちゃんと同じポーズを取ってる会長
さんがいた

「どうわっ!だからお前は」

『いつからいたんですか!会長さん!』

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも着たらどうだ?」

「?何をバカな事を・・・」

あ！じゃあ話す必要ないじゃん！！

「まあそうだけど無視されてるみたいだからやめてくれる？」

『へーい』

「さて！なんで僕が君の夢の中にいるのでしょうか？」

『……まさか……』

「わかったかい？」

『俺のセカンドキスを奪おうと』

』

「違うね」

よかつた！セカンドは守らんと

「ファースト奪われた時点で君負けてるようなもんだけどね」

『……』

「さて本題に入ろうか」

『……』

「返事しないとセカンドも奪うよ？」

『はいすいません！安心院あんしんいんさん！』

このキス魔が！って思いたいけどやめとこう

「それじゃあ本題だ……君は何者だい？」

『は？』

「は？じゃないよ」

『んなこと言われても俺・・・』

「じゃあなんでスキルを持つてるんだい？」

『え、あれ安心院あんしんいんさんがくれたんじゃ』

「違うよ、僕はスキルを把握するスキル「辞書マニキュアル」をあげただけだよ」

『じゃああれって』

「うん君の持つてるスキルだね、しかもスキルはあれだけじゃない
確かに自分の能力スキルに気づかない人も多いけど君はおかしい！！！」

『・・・・・・』

「おや？どうしたんだい？」

『いや誰もいないとは言えいきなり君はおかしい言われたら傷つく
わ！！！！』

「そうかいごめんごめん」

コイツ（怒）

さて！この後もコイツ・・・安心院あんしんいんさんがイラつかせてくるので時間を飛ばそう！

第7話 「ナルシスト!？」 (後書き)

よく見たら主人公紹介に「辞書」^{マニキュアル}書くの忘れてた!

第8話 「やな目覚めだ」(前書き)

今更ですがめだかボックスアニメ化だぁー！

確かこの小説始めて数時間後にこのこと知ったんだよね

あんとき声と言っていいのかわからない声出そうになったし・・・

あらすじ「善吉ちゃんのセンス(笑)」

第8話 「やな目覚めだ」

『で・・・なんで俺がスキル持つてるかすか?』

「そっだね」

『えーと・・・』

「わからないんだったら素直にいいなよ?」

『はい・・・』

いいかげん心読むのやめてくれないかな・・・

「つまり君は何故スキルを持つてかは知らないと・・・」

『はい・・・まあそうですね』

「フッフ面白いなあ」

はい?

「だって君は僕を知つてて
スキルを何個も持つてて

しかしスキルを持つてる自覚が無くて

だが僕のスキル「辞書」ニユアルを使いこなし

しかし「能力」スキルという単語を理解してる

これは面白いよ・・・悪平等ほくに入りたいぐらいだ」

『はあ・・・』

「?どうしたんだい?」

『言う事が多くて萎えてきたんです』

「そうかいそうかい（笑）」

チートとわかっててもぶん殴りた バキッ

痛い・・・まさかリアットが来るとは・・・

「それで？どうなんだい？」

『え〜と安心院あんしんいんさんのスキルを使いこなせたのはマグレで「能力スキル」

のこと知ってたのは・・・あの〜その〜』

「どうしたんだい？」

『あの〜なぜか知ってたでいいですか？』

「納得いかないね」

『ですよ〜』

その時いきなり周りの景色が崩れていく

「おや？もう時間だね」

時間で・・・

「君がそろそろ起きる頃ってことさ、本当はまだ聞きたいことがあるけど、まあいいやそれは今度で

・・・あつ僕は君が深い眠りについいたら来るからね

じゃー」

そう言って安心院あんしんいんさんが手を振ると

目の前の景色も崩れ目の前が真っ暗になった

そして

ガバツ

起きました……

やな目覚めだ……

まあそんなこんなで俺が深い眠りにつくと

決まってあいつが現れ「おい！彦！彦！」ん？この声は

『どしたの？善吉ちゃん』

「どしたのじゃねーよ！とボーっとしてっから
どうしたかと思っただぞ！」

『そいつは失礼、あ、そういえば目安箱に投書あったの？』

「ん？ああ、あつたぜえーとめだかちゃん誰だっけ？」

「有明二年生だ」

「そうそう陸上部の先輩だ」

『そっか』

じゃあ今は二話目か……

く放課後く

「あのごめんなさい本当はこんな事下級生のあなた達に相談するよ
うなことじゃないかもしれないんだけど」

「遠慮はいらん構えるな

私は誰の相談でも受けつける！」

(なんでこいつ上級生に敬語使わないんだろう・・・)

(善吉ちゃんのセンスはどうなってんだろう)

(なんでこのコ生徒会役員じゃないのにここにいるんだろう)

「それで相談っていうのはこのことなんだけど・・・」

有明先輩はボロボロのスパイクと

「リクジよう部ヤめ口」と書かれた紙を出す

「・・・酷いな」

『確か有明先輩って短距離走の代表に選ばれたんですね?』

「え・・・うん・・・なんで知ってるの?」

『え!?!いや別に!遠くからずーっと見守ったりとか尾けたりして
ませんよ!!--』

「・・・」

あれ?引いてる?ここはとりあえず

『冗談です』

「はあ・・・」

『で、このスパイクはいつこんな状態になったんですか?』

「えつと三日前」

「・・・犯人の心当たりは?」

「わかんない、スパイクなんて更衣室に置きっぱなしだし、誰にでもできるし、てゆーか、みんな怪しいし!」

「・・・安心しろ有明二年生この黒神めだが今日中に犯人を突き止めてやる!!」

『「「えっ!!!?」」』

第8話 「やな目覚めだ」 (後書き)

にしても流星のロックマンやってた頃とは
ずいぶんアクセス数が違うな・・・

第9話 「人を信じる事を」(前書き)

今日のジャンプのめだかボックスすごかったな・・・
にしてもなんか上手くかけない・・・

あらすじ「おはようございまーす」

第9話 「人を信じる事を」

『それで会長さんどうやって探すんですか？』

「実に簡単だ

『陸上部女子』で『陸上歴はそれなりに長く』

『短距離走を専門』とし『有明二年生と同種シューズを愛用』

『左きき』で『文車新聞を購読』し『23地区ブロックに住んでいる』

誰かだ」

「はあ？なんだそりゃ」

『?????.....あっ！』

「この靴は『もしもし？袖ちゃん？俺俺、彦』.....」

ガンツ

『いでっ！なにすんだ！？善吉ちゃん！』

「うるせー！」

《あひゃひゃ、よくわかんないけど楽しそうだね》

（数分後）

「陸上部所属三年九組諫早先輩、有明先輩と同じ短距離走を専門とするアスリートで、利き腕は左同じスパイクを履いてるのは見てのとおり、お住まいは23地区ブロックで3年前から文車新聞を購読中

だつてさ」

はあ〜い遅れたけど前回チートババアにラリアットをくらったり善吉ちゃんにも蹴られた白水弓彦しみずゆみひこだよ！

さて現在の状況は有明先輩のスパイクボロ事件（今適当に考え
たZE）
で会長さんが推理に当てはまる人物を探すために袖ちゃんを頼った
って感じだZE

ちなみに袖ちゃんに頼ったって伝えたときの会長さんの顔はすっげ
えー嫌そうにしてたな

あ！言い忘れてた、今は陸上グラウンドだよ

「いやおせえよ」

『善吉ちゃん・・・モノローグにつっこまないで』

「あひゃひゃ、なんで現在の状況伝えているのに
現在地伝えるの忘れるとかバカでしょ」

『袖ちゃん・・・的確なツツコミ&心の折りかたナイスです』

「大丈夫か？涙目だぞ・・・」

「あひゃひゃそんな事より」

え！？人が泣きそうになつてんのにそんな事！！？

「あの諫早先輩有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちし
てます」

「・・・そりゃ決まりだな」

この2人完全に俺のこと無視してるよね
うん殴つていいかな？

ん？あれ？いつの間に会長さんいたの？

「実質的な証拠はまだ何も無いのだほとんどという言葉の意味は
ん？貴様はなぜ泣きそうになってる？」

『いや・・・あの人生につか なんでもありません！』

「人生に疲れた」って言おうとしたけどこの人に言うのもめんどいだ
ろうし

『さて話を戻しましょう』

「ふむ、そうか、状況証拠だけで犯人と決め付けるのはよくないな」

「上から目線性善説もいーけどさ」

『警察じゃあるまいし物的証拠なんて集めようが・・・
なんで袖ちゃんはわくわくしてるの？』

「楽しそうだから」

まあ会長さんは・・・本人に直接聞くような人じゃあ・・・

「諫早三年生貴様が犯人か？」

「!?!」

あるんだよね

にしてもなんで手にスパイクはめてんだろ・・・

善吉ちゃんのズッコケ見事だし

袖ちゃん大爆笑だしつか・・・俺も笑うのこらえるの限界

「しっ知らないっ!?!」

『「あつ逃げた!」』

なんか袖ちゃんと俺の声が被った

「いやまあそりゃ逃げるだろ追うぞ!」

「ところで人吉!」

「あ!?!」

「なんで制服の下にジャージ来てるの?ヘンだよ?」

「今聞くことか!?!」

いや善吉ちゃん・・・袖ちゃんの言うことは正しいZE

まあいいや、追いかけるか、この前見つけた

「アスリート疲れ知らず」と「パティンクルリス半身半技」があれば

追いつくぐらい簡単だろう

『さて行くか!善吉ちゃんと袖ちゃんは・・・こないよね』

「うん帰る」

「早く追うぞ!」

『OK!』

そして俺達が追いつくと

「諫早三年生!貴様が犯人か!?!」

「ちつ違う違う知らないってあたしそんなの!、有明さんのスパイクにハサミなんて入れてないし!、「陸上部やめろ」なんて手紙も出してないし・・・」

(ああああああ何言ってるのよあたし!、聞かれてもないこと自分からわざわざ・・・!!!)「」

「・・・そうか知らないというか・・・」

『ふー追いついた！ん？ここは確か……』

「知らないのならばそれでよいのだ、練習の邪魔をして悪かったな」

「……きみは……きみは……え？あ、あのちよつと……」

「?どうした何か用か？」

「い、いやそうじゃなくて……」

「ああ、そうそう言い忘れていた、さっきは本当にいい走りであったぞ、貴様の普段からの鍛錬の程がうかがえる、その調子で精進し続けるがよい！私は頑張る人間が大好きなのだ！」

「な……なんなのあのコ、わけわかんない、人を疑うってことを知らないの？」

「違いますよ諫早先輩、めだかちゃんは人を疑うことを知らないんじゃない」

人を信じる事を知ってるんだ!!」

善吉ちゃん決まったあー……!!

「……きみは……きみはどうして制服の下にジャージを着てるの？へんよ」

「カッコイイって言え!!」

『ま、今回は見逃すって感じでしょ？善吉ちゃん』

「まあそんな感じですよあんたはもう二度とあんなことしねえって信じといてやる」

そのまま俺達は歩き・・・去っていった

↳翌日 生徒会室

「くっそーこのカツコよさがどうして伝わらねーかなあ」

『諦めるよ善吉ちゃん・・・・・・・・』

「あの人吉くんちよつといいかな？カツコイイよそれも個性的で」

「あつ有明先輩！」

善吉ちゃんジャージ隠したなフォローされたのに

・・・・あつ！そういえば今日俺日直じゃん！

忘れてたー！

まあ話の結末知ってるから別にいいし

その時俺は呼び止められた

「待て貴様・・・・・・・・いや白水同級生！」

！！！！？黒神めだか！？

第9話 「人を信じる事を」(後書き)

今回長・・・・・・・・2000文字越えて・・・・・・・・

第10話 「記憶があった」(前書き)

あらすじ「日直ってどんな仕事やんだっけ？」

今回結構短めです

やっぱオリジナル話は上手く書けない……

第10話 「記憶があった」

『何のようですか？会長さん……』

「うむ貴様に聞きたいことがあってな」

『ええ、俺にすべらない話とかないっすよ？』

「そのような事を聞く気はないのだがな」

だろっね……………

『じゃあ何をですか？俺日直の仕事あるんすけど』

「ふむ、じゃあ手短にしよう」

貴様私とどこかで会ったか？

『はい？』

どういっこと？　？　？　？

「いや私もおかしいと思ったのだよ、なぜなら、ついこの前まで私は貴様の事を一週間ほど前に初めて会ったと思っていたよ」

だが！昨日ぐらいから……………貴様と2才の頃出会った記憶があった」

『？？どういっ』

『

キーンコーンカーンコーン

『あーやべー日直の仕事ー！』

ダツダツダツダツ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（夜）

『あゝ眠い・・・・・・・・あいつ出ないといいけど・・・・・・・・』

あいつのことはまあ第6話見てくれれば・・・・・・・・

ZZZZZZZZZZ

「やあ出ちゃったよ！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

なんか教室のようなどこにいて

見覚えのある俺の大切なもの奪ったおん

ガンツ

こ、今度はドロップキックか・・・・・・・・

『どーも安心院あんしんいんさん・・・・・・・・』

「久々に会ってもう一週間だね

まったくあれから夢で会ってもすぐ逃げちゃって

『起きろー！起きろー！俺起きろー！お願い起きてー！』

ガンツ

次は頭突きか・・・・・・・・

「さて！僕が1つおかしいこと言ったのわかったかい？」

『久々に会って・・・ですよね？』

「うんそうそう」

そつえば会長さんも似たようなこと言ってたような

「うん君が何者か僕はわかってきたよ」

『！！！！？ど、どついうことですか？』

「ずばり君は

異世界から来たね？」

『・・・・・・・・』

第11話 「逆らえないのさ」(前書き)

あらすじ「寝る時が最悪な時間って怖・・・」

シヨックです

一回書いてちよっとトイレ行ってたら書いたやつが全て消えてた
コピーしてあったやつも消えてた・・・
泣きたい・・・

そのせいで最初書いてたやつと結構変わったちゃって・・・
ぶっちゃけ少しおかしくなってます

第11話 「逆らえないのさ」

「君は……」

異世界から来たね？」

『……………』

「さつきも言ったけど僕のさつき言ったことには、おかしいところがある、おかしいのは「久々に会って一週間」って、確か僕たちが出会ったのは一週間前のはず

でも僕たちが出会ったのはずいぶん前ってことになってる」

『……………それってどういう』

「まあ待ちなよ……君は……異世界から来たってことでいいかい？できればそれに関する話も」

ここはあのスキル使うか……

その瞬間俺をまとう空気が変わった

『……………もしもこの世界が漫画の世界っていったら信じるか？』

「雰囲気が変わったね何かスキルを使ったのかな？」

『ああ「冷たい心」^{マインドクール}って言う、どんなことにも好きだけクールになれる、まあ話し方もクールになっちまうんだけど、で？どうなんだ？』

「正直信じがたいけど今回は信じる方向にしとこうかな、それで？」

『俺が好きな漫画があつて、その漫画の世界に行きたいと願ったら入れたと言つたら信じるか？』

「うん！一応信じるよ！」

一応……か……

「大体異世界から来る人はそういう、なんて言うのかな強い願望があるのさ！」

『強い願望か……』

「でもね一番大変なのが……」

異世界から来た人はその世界に馴染んじやうのさ！」

『馴染む……どういう意味だ？』

「つまりはだね何の力なのか、異世界から来た人は前からいたことになるのさ」

『……つまり

過去が変わると？』

「そう！そういうことなのさ！、そして1京のスキルを持つ僕といえど、その現象には逆らえないのさ！まあまだその現象は完全じゃないから、僕もまだ流されてはいないけど」

『知ってるのか？そういう奴を……』

「知ってるけど……それは今度ね！」

すると周りの景色が崩れていく

「ん？時間が経つのは早いね？」
『……………』

「あ！1つ言い忘れた現象が進むと、僕と周りの人たちもちろん君も多くのことが変わるよ」

そう手を振りながらなじみは言う

そして周りの景色は完全に崩れ

目が覚める

あいつが出ると本当に気分最悪だな……
しかも起きる時間が遅れる　ん？

8時30分？HRまで後5分……

ダアアアアアツシュー……………!!!

〈一年一組 教室〉

『間に合った……』

「お疲れ……」

『サンキュー善吉ちゃん……』

「あひゃひゃ、バカみたいな顔して教室入ってきたときは笑ったね

」

『「鬼……」』

さて特に何もないので時間を飛ばそう！

～放課後～

『子犬探しの話はあと数日あるだろうし今日は帰るか』

ダッダッダッダッ

ガンツ！

いてて……校門で誰かとぶつかってしまった

『えーとだいじょ

！！？』

「偉大なる俺にぶつかるとは無礼な奴だ」

み、都城王土！！！？

第12話 「いやファラオ」(前書き)

あらすじ

「走っててぶつかって話が進むってそんな少女マンガぐらいだって」

第12話 「いやフアラオ」

み、都城王土！！！！？

・・・・・・・・・・・・・・・・

なんだこいつか

あのチート女に比べたらまだマシだな・・・
さて今日見たい番組があるし帰るか

そう思つて俺は立ち上がり校門の外へ歩く

「偉大なる俺を無視するかならば

『 跪け 』

グシャッ！！

『 うげー！ 』

喋っただけで地面に体を叩きつけられた！？こゝこれって

「都城王土の真骨頂その？ 『言葉の重み』だよえーと

『 白・・・水です・・・ 』

「よろしく白水くん僕は行橋未造だよ

『 よろしく行橋先輩 』

嘘オ……一応

体の半身を強化するスキルと
疲れないスキルなんだけど……

「それにしても貴様なぜこの距離を走って疲れていない」

本っ当にめんどくさい……

『やせ我慢です！』

「そうか」

納得すんのかよ!!!

「ふむちようどいい余興だったな

さて王たる俺から逃げたのだから罰を与えねばな」

完全自己中だよ……とりあえず

パーティングリス
「半身半技」解除！

……なんかいいスキルはないかな

ん？これ良さそうだな……

「まずはそうだな

『平伏せ』」

『やだ！』

「!?!?!」

フツフツフツこれが俺のスキルの1つ

「ことだまのさきはつひとびと言葉の幸ふ人々」だ

言葉の重みと同種のスキルで電磁波だけじゃなく
なんというか・・・本能を操るスキルって感じかな
まあちょっと言い過ぎな気もするけど気にしない方向で

今回は電磁波の力を使って言葉の重みと相殺させただけ

「ふはっ！なるほど貴様、ノーマル普通ではないな？」

『ん？いやいや俺は普通ですよ？』

「ノーマルフンまあいい一応名前を聞いておこうか」

「うらひまゆみ白水弓彦です」

『白水が覚えておこう』

そう言っつてファラオは去っていった

さてしばらくファラオにエンカウントしないようにしないと・・・

さて時間はと・・・

ああーーーーー番組もう終わってるーーーーー！……！

第12話 「いやファラオ」(後書き)

ファラオと行橋の話仕方これであってるかな？

第13話 「ハウンドも入ってる」 (前書き)

あらすじ「無視しないでよーえーん」

第13話 「ハウンドも入ってる」

.....

あれ？始まつてる？

はい！話が始まつたのを気づかなくて最近自己紹介をしてなかった
白水弓彦しみずゆみひこだよ

今の状況は都城王土を呪う準備をしてるところ

ではないけどね

実際は 回想へどうぞ！

「子犬探しするから手伝ってほしいんだけど」

です！

「何さつきからブツブツ言ってるの？キモイよ？」

『袖ちゃんってぶつちゃけどSだよね・・・』

「彦・・・今更か？」

「気づくの遅いよ」

もっと細かく言うと会長さんから子犬探しの仕事を一任され

袖ちゃんに心当たりのある場所に案内してもらってるところだよ

そういえば安心院あんしんいんさんからいろいろ変わるって言われたけど何も変わらんけど

どうなってるんだ？

「にしても意外だね！あの無敵のお嬢様にそんな弱点があったなんてさ！」

『ん？弱点？』

「動物が苦手なんだって」

『へ〜』

確か・・・ここは・・・

「まあな完璧超人みたいに言われてっけどめだかちゃんにも色々あったよ

あいつ小学一年の頃に飼育係やったことがあってさ

その時々あったんだよ、トラウマじみたことがな

『「へえ〜」』

「だけどさそんなこと言ってちゃ業務に支障きたさない？」

「だーかーら！そういう時のために俺がいるんだろが！さあ不知火

！わかつたら早く俺を案内するんだその心当たりの場所とやらにな

！！」

「ああ、うん、いいんだけど別に」

『「そのテンションキモイな〜」』

袖ちゃんと俺の声が被る

っていうか俺必要なくない？

「えーつと確かこの辺だけど

おっ！着いたか

・・・そこには犬というより猛獣に近い生物がいた

いやガチで……なんかグルルツって聞こえるし

「あーいたいた！ね！あの犬だよね」

「不知火さんあれは違うよ、あれは散歩中に飼い主とはぐれた可哀想な犬とかじゃなねーよ、あれはあれだよ大都会に住んでる無責任な金持ちが、飼いきれなくなつて手放したワシントン条約で保護されてる何かだよ！！」

『あれは犬じゃないよ猛獣の部類に入る熊とかと格闘するような生物だよ』

「やだなあ2人もあれはボルゾイって種類のれっきとした犬だって別名 ロシアンウルフハウンド！」

「ほら！ウルフって入ってんじゃん！！」

『ハウンドも入ってる！？』

ハウンド≡獵犬……あつても一応犬だ……

「嘘だろ？俺今からあいつ捕まえるの？マジで？くっそ……信じらんねエ、不知火、彦、お前ら手伝ってくれるんだよな？」

「え！？あたしが！？なんで！？やだよ！！」

あたしは親友のあんたが酷い目に遭うのを
安全圏から眺めていただけの人間なんだから！！」

『俺も嫌です！善吉ちゃんがSATURIKUさせるのを見るだけにする！』

「いや、お前らは人間じゃねえよ」

「あんたの勇姿を写メで撮って待ち受けにするの!」

「お前今日中に天罰くだるぞ」

ムクリッ

《ガウガウツガウツ》

なんかビリビリする!?

いやいやいや犬が吠えてビリビリするってどんだけ!

「・・・ほら」

『お兄ちゃんこっちにおいでよ一緒に遊ぼうよ』って言ってんじや
ん

「どうだろうな、俺には」

『ヒト共!次に俺様の眠りを妨げれば容赦なく食い散らかすぞ!』
って聞こえたけど」

『俺には』その黒いおにいちゃんと遊ばせてよ!』に聞こえるけ
『ど』

「俺に死ねと!」

「じゃあもう帰る?すごすご帰っちゃう?せつかく人吉がお嬢様に
いいトコ見せるチャンスなの?」

痛いトコをつくな袖ちゃん・・・

「あーわかったよ！行きゃーいいんだろ行きゃー！！！」

「あつ待ってよ人吉！行くんだったらこれを持っていくんだ！、あたしのお昼ごはん！」

テッテレテーンって音楽と共に袖ちゃんはソーセージを出す
っていうか袖ちゃんそれで足りるのか？

第14話 「せめてくよ会長ちゃん」(前書き)

あらすじ「ワシントン条約?なにそれおいしい?」

第14話 「やめとくよ会長ちゃん」

やあ！犬ゆみじこⅡ猛獣に吠えられただけで吹き飛ばされそうになった白水しらみず
弓彦ゆみじこだよ

今は子犬探しをしてるんだ！そんな時エンカウントしたのは犬（？）
だった

そして袖ちゃんがとった秘策とは――――！！

「なんだ今のあらすじ……」

『まあまあ気にすんな善吉ちゃん』

「で、不知火が取り出したのは……ソーセージ？ああ、なるほど
！こいつを餌付けに使うわけだな！？冴えてんじゃん！」

「んーんそうじゃなくってさ

これをおなかのトコに仕込んでね

『ぎゃああ！内臓喰われたー！……と見せかけて実はソーセージ
でした』ってギャグやってほしいの」

『不知火先輩パネツス』

「そのギャグさあやった2秒後に本当に内臓喰われるよな？」

『ま！頑張れ善吉ちゃん！！』

「……クソツやつぱ俺がやるしかねえのかとりあえず貸せ！うっ
うおおおおお」

男だぜ善吉ちゃん

善吉ちゃんが突っ込むと犬^ニ猛獣の目がギンツと見開き
口を大きく開けて善吉ちゃんを・・・

「ガウツガウツガルルツ」

「ぎゃああ！内臓喰われたー！と見せかけて実はソーサー・・・
つてマジでぎゃあああつ！！」

善吉ちゃん！！袖ちゃんは・・・

「ああステキ！ステキ！人吉くんてば超ステキ」

《パシャパシャパシャパシャ》

まあこついうエゴイストキャラなんだよね

善吉ちゃんの生死？・・・絶望的だね

（生徒会室）

「えーというわけでございまして不知火と彦と一緒にターゲットを
発見するも捕獲には失敗その後の逃走を許してしまいました」

「・・・そうかまあなんとというか善吉と不知火の仲の
良さは不愉快だな」

『ああ会長さん俺見たいテレビあるんで帰っていいですか？』
「ん？そうか彦貴様は生徒会役員ではないから帰っていいぞ」
『あーい』

そう言つて俺は生徒会室の扉を開けようとして

ガシツ 『ぐえっ！』

としたら制服の襟をつかまれ息が一瞬できなくなる

『な、何ですか・・・会長さん』

「いや言いたい事があつてな」

『・・・・・・・・なんですか会長さん』

「なぜ会長さんなどとよそよそしい呼び方なのだ？」

『へっ？』

「昔のようによだかちゃんと呼ぶがよい！」

凜っ！！！

む、昔？どうゆうこと？俺会長さんと会つたのはついこの前
しかも会長さんから呼ばれるときは白水同級せ
！？

そういうことか・・・・・・・・

安心院あんしんいんさんの言つた

「俺がこの世界に馴染んでこの世界の何かが変わる・・・・・・・・だっ
け？」

まあともかくそのせいで会長さんの中では俺が昔からの知り合いになってるのか

「……………確か2才の頃会った記憶があるとか言ってたから2才の頃からの知り合いって感じが……………」

「っっていうか俺には直接影響なくね」

「ここまでの思考時間3秒」

ちなみに「冷たい心」マインドクールは使っていないよ

「どうした？彦？」

「あっ善吉ちゃん忘れてた」

「善吉ちゃんは会長さん」「さあめだかちゃんと呼ぶがよい！」

『いやなんか恥ずいのからやめとくよ会長ちゃん』

「（会長ちゃん？）」

「ふむ、そうか残念だ」

『まあ気が向いたら呼ぶよ、んじゃガチで見たい番組があるから』

「うーんついさつきまで敬語を使ってたからなんか変」

「とりあえずなれなれしく「会長ちゃん」にしといたけど」

「……………あっアレ始まつちやうよ！」

そのまま帰る途中に……………少し気になるので犬「猛獣のいる場所へ行ってみた」

好奇心には勝てないね

「……なんか会長ちゃんが犬(?)の格好してる……」

『何してるんで……何してんの?会長ちゃん』

あやつく敬語使うとこだったぜ

「ん?おお、彦か、見てわからんか?」
『うん』

なんかキツパリって音が聞こえた気が……

「ターゲットに私を仲間と思ってもらおう作戦だ!」

一瞬袖ちゃんの中の時が止まるそして復活

「……ねえ人吉このお嬢様ひよつとしてさあ……」

「あ、気づいた?うん、一週回って基本バカだよ」

「?」

『………プツ』

「(笑ってるよ……)」

「さてそれであやつがターゲットか」

会長ちゃんがチラッと犬⇨猛獣の方を見る

「ふうむなるほどな、なかなかどうして可愛いワンちゃんではないか!」

あれが……可愛い……だと!

「あんま強がんよ不知火と彦と三人で何とかするからさ！」

善吉ちゃんがそう言うのと会長ちゃんはすごく嫌そうな顔をする

「ふん！いいから貴様達はそこで見ているがよい！私がいつまでも過去に囚われる女ではないことを証明してくれる！」

「……………？何ムキになってんだあいつ……………」

「妬いてんじゃないのー？あたしと人吉と彦が仲良すぎるから」

え？俺も？

「あ？俺はお前と友達なのかどうかも微妙だと思っただけ、的外れにも程があるだろ」

「あひゃひゃ！いずれにしてもお嬢様って案外人間味があるんだね、バカだったり妬いたり動物の事苦手だったりさ」

『ん？袖ちゃん1つ勘違いしてるよ』

「そうだぜめだかちゃんは動物の事嫌いなんかじゃねーよむしろ半端なく大好きだ」

会長ちゃんが犬イコー　　え？しつこい？知るか！

犬⇨猛獣に近づくと犬⇨猛獣はビクツとし会長ちゃんの後ろに悪魔を見るように怯える

「さあ怖くないぞ撫でてやろうぎゅっとしてやろう一緒に遊んでや

ろう！だからさあ！私に貴様を触らせる！！」

いや最後めいれ あつ犬Ⅱ猛獣がガバツと立ち上がって
こっちに来て俺と善吉ちゃんの後ろに

「え・・・と人吉くん彦くんこれどーゆーコト？」

「だからさめだかちゃんが動物を苦手なんじゃなくて」

『動物が会長ちゃんを苦手なんだよ』

そう俺達が言つと善吉ちゃんは犬Ⅱ猛獣の頭を撫でる

俺？俺、実は犬苦手なんだ、作者と同じで

「えーというわけでございましてボルゾイくんは無事に投書主の下へ帰りました、子犬の頃より若干おとなしくなっているそうですが一件落着には違いないと」

「・・・・・・私はあんな可愛いワンちゃんにもなついてももらえないなんてわたしはどうしようもなく駄目な人間だ・・・」
「いやまあな？確かにお前は人間だよ」

・・・結局テレビ見れなかった・・・

第14話 「やめとくよ会長ちゃん」(後書き)

主人公これで遠慮なく原作を読んで知った知識を言えるな
今回長い・・・2400文字越えした

第15話 「うん野菜ジュース」(前書き)

あらすじ「会長さん 会長ちゃんの方程式(?) 完成」

第15話 「うん野菜ジュース」

（食堂）

わいわいわいって言葉が聞こえるな

あ、もう皆知ってると思うけど皆のお兄さんじょうぢやまひじ白水弓彦だよ！

今は食堂で袖ちゃんと善吉ちゃんとひゅうちゃん（日向）と飯食ってるところだよ

袖ちゃんは絶賛ラーメンに顔突っ込み中

前回結構設定的なものが変わったよ！

「えーつと昨日ボクシング部行ったから・・・格闘技系はこれでコンプリートか、じゃあ次は趣向を変えて格闘球技攻めてみっかなー」

《ズズズ》

「・・・・・・お前どうしてそんなあちこちで暴れてんだ？
そんなスポーツ好きだったっけ？」

《ズズズ》

「別に、俺の中のルールでな、一日5リットル汗かくって決めてんだ、お、ラクロス部あるじゃん」

《ズズズズズズズズ チュルンツ》

「ぷっはあああああ、あーわかるわかるあたしも一日5リットルのラーメン飲むって決めてるし」

「不知火、ラーメンはドリンクじゃない」

『袖ちゃんにとってシーザーサラダって・・・』

「うん、野菜ジュース」

「ま、それくらいにしないとあの黒神バケモンには付き合いきれないってのはわかるけどもうやめといた方がいいかもな」

おお！ひゅうちゃん！ナイス無視！

「お前の噂になってるぜ生徒会の『部活荒らし』だとよ、入る気もないくせにして」

善吉ちゃんがひゅうちゃんをじーっと見る

「なにお前俺のこと心配してくれんの？」

「バツお前の心配じゃねーよ！！」

ひゅうちゃん完っ全にツンデレってやつだよ・・・

「いーんだよこちら最初から名前を売るつもりでやってんだから、っ！かお前なに仲間みたいな顔して一緒にごはん食べてんだよ」

善吉ちゃん・・・何気にキツイ・・・

「・・・?」

「カツ！しかし「部活荒らし」かそのニックネームじゃ少し弱いな」

「名前を売りたいのかい？人吉くん」

「鹿屋・・・先輩」

え！？こえっ！！突然現れた人こわっ！？第一印象こわっ！！

「ちよいと面貸してくれや人吉くん、相談に乗ってほしいんだよ、なあーに人吉くんにとっても悪い話じゃねーと思うぜ？」

「・・・・・・・・・・なんか怖そうなヒトだったけど人吉一人で行かせてよかったのか？」

「んー？別にいーんだよあたしと人吉って都合のいい時だけ友達だし」

「いや僕も結構悪いやつだけどさ、お前は最悪だな不知火！！」

「あれ？白水は？」

「んー？ついてったよ」

「まーあいつなら大丈夫か・・・」

《プチンプチン》

「黒神めだか襲撃計画？」

『面白そうな計画ですね』

「ああ今有志を

！！だ、だれだ！？てめえ！」

『みんなの人気者一年一組白水弓彦です！』

「そうかじゃあ白水くんも一口乗らねーか？今有志を募ってんだよ」

いやー人を驚かすって気分いい！え？性格悪い？ほめ言葉だぜ！

「キツイ冗談ですねこの腕章が見えないんですか？どー考えても誘う相手を間違ってるでしょまあ彦を誘うなら別にいいーですが」

『え！？俺いいの！？ちよっちよっ善吉ちゃん』

「うざい！寄るな！」

とゆーかこの先輩なぜ学校で爪を切っている？家でやれよ学校に爪切り持つてくる人始めてみた

「いやあ間違えちゃいねーさ生徒会庶務とかいつて結局はバケモン女のパシリやらされてるだけじゃねーか入る時もかなり抵抗したって聞いているぜ、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かここ少し長めの話になるから少し飛ばさせてもらおうか

『そつえば袖ちゃんから聞きましたが鹿屋先輩って女子脅して票集めてたらしいですね、そこを会長ちゃんにやられてキレると・・・』

「自業自得ですよ」

「ハッ！いい子ぶってんじやねーよ人吉くん！俺はこれでもお前を買ってんだぜお前みたいな頑張り屋さんを埋もれていくのを見てらんねーんだよお前にだってなりたいモンぐらいあんだろ？」

「なりたいもの……ですか」

「今日の放課後作戦会議やっからよこっちに寝返るならそれまでに
な、なあにたとえお前が裏切ってもあの女は気にもしねーだろうよ」

『「」』

第15話 「うん野菜ジュース」(後書き)

さて長くてきりがないので今回はここまでです！
なんか中途半端ですいません

第16話 「余計な真似だよ!!」 (前書き)

あらすじ「深爪した・・・」

第16話 「余計な真似だよ!!」

『「……………」』

そのまま鹿屋先輩はどこかに行ってしまった

「はあーあ！めんどくせーことになってんなあ！」

「いやめんどくさくない実に心躍る展開だ」

いつの間にか善吉ちゃんと同じポーズをとる会長ちゃんがいた

「……………いつからいたの？」

「最初から」

凜っ

『会長ちゃん前から思ってたけどその「凜っ」ってどっやって出てんの？』

「だったらお聞きの通りだ嫌われたもんだなめだかちゃん」

え？無視？

「構わんさ、もとより私は人から好かれようとは思っておらん、私が人を好きであればそれでよい」

会長ちゃんが

(初代プリキュア……の白い方……)

のポーズをする

ちなみに作者も俺もプリキュア知らないぜ!

「余計なマネをする出ないぞ善吉、彦、この件は私が個人で対処する、下克上を受けて立つのも王の務めだ!」

「余計な真似?するわけねーだろそんなこと」

『会長ちゃんは敵すら好むからね』

「鹿屋さーんエモノはこれくらいありやいいんですよねえ?」

「……いやこの倍は欲しいな、それともっと長エのたくさん揃えておけ」

「警戒しすぎじゃないスか?いくら化け物じみてるつっても相手は女一人でしょ?」

「馬鹿野郎!化け物じみてんじゃねえ!化け物なんだよ!アイツは!おい!誰かあのバケモンの弱点とか聞いたことねーのか!」

『動物が大好きですよ』

「好きなモンじゃねえ!じゃくて
!!て、てめ、し、白
水!」

『どーも鹿屋先輩……』

「……まあいいさお前が来るってことは……」

ガラッ

「お・・・おお！人吉くん！いやー遅かったじゃねーか、待ってたぜ・・・つて、え？」

善吉ちゃんは鹿屋先輩を無視して教室の真ん中に歩き武器が入った箱を蹴り倒す

「・・・・・・・・・・・・・・・・何の真似だよ」

「めだかちゃんはアンタ達みたいな人も大好きだしアンタ達が何をしたところで傷ひとつ負わないでしょう、だけど知っちゃったらこうせずにはいられない一人で何でもできる幼なじみを俺は・・・・・・・・俺達は放っておけないんですよ、鹿屋先輩なりたいたいものらいあるだろうって言うてくれましたよね俺達はめだかちゃんを守れるやつになりたいんですよ」

善吉ちゃん長いセリフご苦労さんです・・・ん？あれ？おれたち？俺も！？

「ハア？わっわけわかんねえ！だから！これは一体何の真似だよ！！」

鹿屋先輩が釘を刺した棒で善吉ちゃんを殴ろうとする

『「余計な真似だよ！！」』

善吉ちゃんと俺で鹿屋先輩を蹴り飛ばす！鹿屋先輩は壁に叩きつけられる

『アンタ達には改心する暇も与えませんよ、明日から頑張つて噂を流してください』

「生徒会長黒神めだかのそばには凶暴な番犬イヌが二匹いるつてな！
それではこれより一身上の都合に基づき生徒会を執行する！！」

あれ！？また俺入れられた！？あと俺、犬嫌いだし！！

ちなみにその頃の会長ちゃん

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰も来ない！」

第16話 「余計な真似だよ!!」 (後書き)

何気に原作のこの回結構好きなんだよね

さて!今回はアンケートをとりたいと思います

アンケート内容はコレです

彦に並ぶオリキャラはどいうのがいいかです

名前でも性格でも容姿でもスキルでもなんでも言ってください!
皆さんの送るやつによってオリキャラは変わります

例 性格 真面目・・・とかです

表現の難しいのはやめてください

ちなみに性別も考えていいですが女子キャラの予定です

ではよろしくお願いします

注 オリキャラの設定の募集ですオリキャラの募集ではありません
まあオリキャラを送ってもらって結構ですが

第17話 「いやウザメンが」(前書き)

あらすじ「BOOKBOOKにしたぜ」

第17話 「いやウザメンが」

はい皆！白水弓彦お兄さんだよ！
しんじゆみひ

今日は善吉ちゃんと会長ちゃんと柔道部に来てるよ！

なんか三年生でしかも特待生チムトクタイの柔道部部長の鍋島猫美さんからの投書で柔道部の部長を決めるらしい
ちなみに鍋島先輩は柔道界の『反則王』と呼ばれてるらしい

でもなんか善吉ちゃんのテンション低いな、なぜか聞いてみるか！

『どうした善吉ちゃん・・・なんか嫌なやつに会わなきゃいけないような顔してるよ？』

「なぜわかる」

『えーと・・・勘？』

「あっそ」

ツッコンでよ・・・

「なんであの人もこのガッコに来てんだよ（ブツブツ）」

「何をブツブツ言っている？着いたぞ」

『え？展開はや・・・』

つていうか・・・ダンッ ドガッ とかいう鈍い音が聞こえるんだけど、怖・・・

そして道場に入ると

「やーやーようこそいらつしやいませ！ウチが差出人！柔道部部长の鍋島猫美でっす！今日はどーぞよろしく！」

かるっ！反則王かるっ！

「生徒会長の黒神めだかだ、今日はできる限りの事をさせてもらっぞ」

「うんうん頼りにしてるで黒神ちゃん！ところでその子は何者なん？」

『え？俺すか？』

『そージブンやジブン！』

『えーと白水弓彦です気軽に彦と読んでくださいな』

「・・・そつかよろしくな彦くん！ウチのことはテキトーに読んでくれていいで！・・・あ！そーや黒神ちゃんに挨拶したい奴おんねん阿久根！おーい阿久根くん！」

鍋島先輩・・・いやナベちゃんがそう呼ぶと

「いやテキトーにっていうたけどナベちゃんはないわ」

『なぜ心が読めるんですか・・・』

「んー？勘？」

『そうですね・・・』

まあいいや、すると道場の端のドアが開くと

なんとということでしょう！うざいくらいのイケメンが入ってくるではありませんか！

うん・・・死んでほしい・・・これほとんどの同年代男子の心の声だね

そのイケメン・・・いやウザメンがこっちに・・・会長ちゃんに一直線に向かう

そして会長ちゃんの前で跪き

「ご無沙汰しておりますめだかさん 生徒会立ち上げの大事な時期にお気をわずわらせてはいけないと控えておりましたがずっとあなたに再会できる日を心待ちにしておりました」

・・・・・・・・・・・・・・・・気持ち悪い！！！！！！！！！！

気持ち悪いから善吉ちゃんの隣に避難しよう
そんな気持ち悪いウザメンを会長さんは

「堅苦しい真似はよせ阿久根二年生他の者が見ておるぞ貴様ほどの男がそのように振る舞っては示しがつくまい」

「いえ誇りこそすれあなたにかしづく姿を恥とは思いません、今の俺があるのはあなたのおかげなのですから、めだかさんにはいくら感謝してもし足りない」

会長ちゃんはウザメンの頭を強く掴むそして

「私に感謝していると言うのなら頭を下げるな！胸を張れ！！」

「は・・・はいっ！めだかさんのっ御心のままにっ！！」

気持ち悪いよ（泣）善吉ちゃんもウザそうな顔してるし・・・

「おっとそれはそれとして生徒会を執行せねばな、後継者、つまりは新部長の選定だったかとりあえず貴様は特別枠だ阿久根二年生善

「「!!」」

「なんだい、いたのかい？白水クン」

「彦、いつの間に……」

『え！？気づいてなかったの!!?』

「まあそれはそれとして、久しぶりだね白水クン」

ん？久しぶり？……ああ！現象でこの人も前からの知り合いになつてんのか……

『お久しぶりです……ところで……俺あんた……あなたのことなんて呼んでましたっけ?』

そこかよ!!?ってツツコンだ読者の皆さん！ココ重要です!!!

「え……高ちゃんと呼んでたけど……いきなりどうしてそれを？」

『いえ！なんでも!!!』

高ちゃんか……俺先輩まで「ちゃん」付けしてたのか……

グシャ!!!!

『「「!!!!」?」「」』

会長ちゃんの方を見てみると人をなぎ倒していた

そしてどうしてこうなったのか

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本！それも今回は特別ルール！二対一な！」

どうしてこうなったの？

第18話 「逃げちゃ」(前書き)

あらすじ「イケメン抹殺！」

第18話 「逃げちゃ」

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本！それも今回は特別ルール！二対一な！阿久根クンに十本取られるまで一本でも取れば2人の勝ちや」

どうしてこうなったの？

なんか・・・善吉ちゃんをくれとかナベちゃんが言ってたのは覚えてるけど・・・

「彦・・・覚悟決めとけ・・・」

『・・・・・・・・逃げちゃダメすか？』

「逃げる？そんなものアリなわけなからうが、誰からの相談でも誰からの挑戦でも受けつける 如何な内容でも如何な条件でも！如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会執行部だ！！人吉善吉、白水弓彦、私は貴様らに負けるなどは言わん、しかし逃げることは許さんぞ！！」

凜っ

『俺生徒会じゃねーんだけどー！！』

「ふむ・・・そうだったか・・・まあいい」

『え！？じゃあ逃げても 』

「逃げるな」

『ガーン！！！』

すると善吉ちゃんが小声で話しかけてくる

「彦……一気に決めるぞ、先手必勝！」

善吉ちゃんが高ちゃんに向かって走る

しかし高ちゃんは善吉ちゃんをあつさり強くひっくり返す

そしてこう言う

「人吉クン俺は何もキミのすべてを否定しているわけじゃない、めだかさんについていくために費やしてきたキミの努力は認めている、だが努力以外は認めない！！」

「ガ……ガハアツ！？」

「立てあと九本だ、白水クン君はそこで見ているだけでいいから」

『うーん……頑張れ善吉ちゃん！』

「裏切り者ー！！」

そして数分後

「くそっ！もう九本取られちゃった……」

『大丈夫か？善吉ちゃん！立てる？』

「うるせえ！裏切り者！！」

『まあ聞けつて……ボソボソ』

「！……できんのか？」

『任せてちよんまげ！』

「白水クン……参加するのかい？」

『さあ〜どついでしょ〜？』

善吉ちゃんが立ち上がる

「訂正しよう努力以外にその根性も認めてやる・・・いいだろう！
その往生際の悪さに敬意を表してもう楽にしてやろう！めだかさん
の足を引つ張る仕事も今日で終わりだ人吉くん！」

高ちゃんが善吉ちゃんに向かって走る・・・とどめを刺すために・・・
だがその足が止まる・・・俺が高ちゃんを真正面から受け止めたか
らだ

「白水くん!？」

『悪いですけど悪あがきさせてもらいますよ』

「そうか・・・なら仕方ない」

うおっ!?! 投げ飛ばされる!?!?・・・しかーし!!!

踏みとどまる!!!

「な・・・に・・・!?!？」

どうやって踏みとどまったかは・・・あれだ

「パートインクリス半身半技」を使った一応説明すると

体の半身、又は、一部を強化するスキル・・・です!

それを使って足首を強化して踏み止まってるって感じだ

そして! 「バイオレンスナックル暴力以上の暴力」!!!

これは自分に暴力的な強さを与えるスキルだ!

一応身体能力も強化される
ただし反射的に暴力的な戦いをしてしまう！そこを「冷たい心」マインドクールで抑える

これも説明しとくと自分と体を冷静にクールにするスキル
自分をクールにする事で反射を抑えている
ただし口調もクールになってしまう

さて長い解説は終わりだ、これで決める！

俺は高貴を押し飛ばす

そして高貴の体勢が崩れたところを

『今だ！善吉！』

「ぐ……」

！！！？やばい！善吉フラフラだ！

……いや確かココは

「善吉！いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなどは言わん、だから勝って！！」

きやる〜んという音が聞こえる

「貴様がいなくなったら私はすぐく嫌だぞ、困るぞ、泣いちゃうぞ
！」

「あーっもうっ……お前が泣くところなんか見たことねえし、見たくもねえよ！！」

そう大声で言いながら善吉は高貴の足を掴み引つ張り倒す

「もっ 双手刈り！」

「珍しい！なんであいつあんな技知ってたんだ！？」

「文字通りアンタの足も引つ張つてもみました
　　つてところ
で何を認めてくれるんですたっけ？阿久根先輩」

「……………負けを認める！一本取られたよ」
もうスキル解除していいかな……

「……………信じられへん二人がかりとはい
え阿久根クンにホンマに勝つてしまいたいやそれよりも双手刈りなら
ウチもよう使うけど人吉クンはなんであんなにも綺麗に……！」

「綺麗も汚いもないし天才も凡才もないいるのはただの懸命な人
間だけだ私も貴様も何も変わらんよ」

「……………なあ黒神ちゃん阿久根クンて柔
道も綺麗やけど字イも綺麗やって知ってた？」

『結局継ぐのは……じょう……なんだっ たっけ……』
「わかんね忘れた……」

「じゃあプリンスは？阿久根先輩はどうなったの？」
「さてな、なんか居辛くなつて柔道部やめたつて聞いたけど、ま、

俺達にはもう関係ねえ

「

ガラッ

生徒会室のドアを善吉ちゃんが開けると・・・なぜ・・・

なぜ高ちゃんが着替えてんだーーーーー!!!?

そしてなぜ袖ちゃんはキヤーキヤー言ってるんだ!!!?

そんなわけで阿久根高貴が仲間になった

え？俺の意見？『イケメン消え去れ!!!』

第19話 「なんで俺」(前書き)

さてついに2巻突入です!!

いやゝ遅かったなゝ予想以上に長引いたなゝ

これからもよろしくお願いします

あとアンケートもお願いします

あらすじ「阿久根高貴ゲットだぜ!!」

第19話 「なんで俺」

生徒会の自主性を何より重んじる箱庭学園

その生徒会業務は多岐にわたるそれが何を意味するかというと

『「俺達の限界。」』

「……………人吉くん、俺生徒会やめちゃダメかなー？」

「あつはつはつ！逃がしませんよー阿久根先輩」

『俺は何故手伝わされてる？帰っても』

「逃がさん！！」

「……………しかし、さすがにめだかさんはさすがだなあ、俺達の十倍は働いてるはずなんですけどね」

「否、そんなことはない、さすがの私も最近の業務ラッシュには少し参っておる」

そう言いながら会長ちゃん片手2本両手4本でペンを持って書類を片付けていく

「どごが？」

「勧誘期間が終わり部活動が本格化したのが大きいな、部費に関する陳情が多過ぎる！」

「カツ！副会長はともかく、会計の不在はやっぱり痛いな」

「元柔道部の人間として言わせてもらえば部費は一円でも多いほうがいいですからね陳情する連中の気持ちはわかり
バタンッ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「あれ？彦は？」

「む？そこの窓からでてったぞ？」

「逃げやがったあー！！！！」

大成功！！

「部活動対抗水中運動会？」

「おう、こないだ完成したバカでけえ屋内プールがあっただろ、次の日曜に ガラッ」

『ウィツス！袖ちゃん 「コノヤロー！！」がふっ！』

一年一組の教室に入ったら善吉ちゃんにアッパーをくらった・・・

『ひえんふいふいふあんいひあい』

あごが痛くて上手く話せん・・・ちなみに訳すと『善吉ちゃん痛い』だよ

「人吉話の続き」

「あーはいはい」

るよ！」

善吉ちゃんは袖ちゃんの肩に手を置く袖ちゃんは目元を光らせその手をはじく
そして

「教えてください・・・だろ？」

『「教えてください！」』

「よかるうー！」

((あの3人の仲の良さが気持ち悪い！))

「いるんだよ、そういう奴らが！3人とも特待生でその実力は折り紙つきだけどにかく金の亡者！賞金つきのレースにしか出場しないとか！お金で雇われて他校の選手として泳いだりとか！八百長なんて当たり前で独自に賭けレースを運営してるなんて話もあったねえ！」

『へえ〜』

「ま、精々用心しとけば？あのお嬢様は無敵であったも決して無敗じゃあないんだからさー！」

『さあ貴様達戦争の時間だ、働かざるもの食つべからずと云つがこれは真理に反している、私達はむしろ言つべきなのだ』

働いたものは食ってよい！貴様達欲しい部費モは勝って得よ！！」

・・・相変わらずの大言壮語だね・・・にしても高ちゃんが目ハートにしてて気持ち悪い・・・

『ところで善吉ちゃん・・・』

「なんだ？」

『なぜ俺までこういう水着かっこうなんだ！？』

そう今俺は水着なのだ！なぜ水着かというと・・・

「仕方ねえだろ今回の水中運動会は4人でチームなんだから」

『なんで！？部活動對抗じゃないの！？』

「いや白水クンどうやら」

『この水中運動会には我々生徒会執行部も参加する！』

なるほどね

.....

『なんで俺なんだ—————！！！！！！』

俺の叫びがプール内に響く

第20話 「短っ！そして浅っ！！」（前書き）

あらすじ「オリ主は巻き込まれる運命である」

第20話 「短っ！そして浅っ！！」

「部活動対抗水中運動会！第一種目は水中玉入れ！でわでわっ！これより開始したいと思います！ルールは説明しなくてもいいですよね！プールの底に沈めてある各チーム20個ずつのお手玉を制限時間内にできるだけ多くカゴの中に投げ入れてください！カゴに入ったお手玉の数がそのまま獲得ポイントとなります！それじゃーみなさま！はりきっていきましょーっ！おーっ！と申し遅れました！本大会実況はわたし放送部部长代行、阿蘇短冊が！解説は

「この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんです！」

「がお送りします！！」

「えー不知火さんは生徒会執行部所属人吉さんと白水くんの大親友ということですか？」

「うんそうだよー長ーく深ーいお付き合い！ま、2人のことならなんでもあたしに聞いちゃいな！」

「はー！ちなみにお2人とはどういったなれそめで？」

「エットネー中学までは別でー人吉とはこの四月初めて会ったんだけどーあいつあたしが落としたり消しゴム拾ってくれたのー！彦はこの前お弁当のおかず交換してくれたの！」

「短っ！そして浅っ！！」

(不知火の奴・・・まーた適当な事言っつてんなあ・・・)

『袖ちゃんには困ったもんだよね』

「ククク！ルールの設定間違ってたんちゃうけ？」

『ナベちゃん・・・』

「ナベちゃんやめてくれへん？」

『お断りします、っていうかナベちゃん引退したはずじゃ・・・』

「ククク！まあ部長職こそ引退したけども！ウチは反則王の称号まで捨てたわけやないんでな！」

（（（なんでこの人はこんな堂々と卑怯なんだ・・・？）））

「構わん反則も卑怯もそれが貴様の志なら貫くがよい、無論私は私の志を貫くぞ、いい戦争をしよう鍋島三年生」

凜っ

（（（・・・・・・着替えてる）））

つか高ちゃん目えハートにすんのやめて・・・

『えー部費増額を賭けた本大会ですがまずは第一種目どう見ますか解説の不知火さん？』

『んー玉入れなんてみんな小学校以来だろうから得意も不得意もないと思うけど強いて言うならバスケットとかが強いかにゃー？』

『え？バスケットですか？』

『うん水中だろうが陸上だろうが玉入れは玉入れだし、結局はカゴにボール入れられなきゃ話にならないからねー』

『・・・・・・』

『なに？』

『いやまともなことも喋るんだなーと思つて・・・』

『まあ玉入れには玉入れのテクニクがあるんだけどもそんなの知つてる奴いないだろうし？あたしはちゃんと働くよん、もらった食券分はね、だからあたしが注目してんのは玉入れとかどーとかそーいうトコじゃないんだよねー』

不知火は怖い笑みを浮かべる

『・・・えーと・・・あれ？（なんだこのコ、コワイぞ？）あ、あら！そんなことを言つてる間にもう時間一杯ですな！みなさん準備はよろしいでしょうか！位置についてよおおおおい！』

『ドン！！』

『ぬおおお！！お手玉重い！プール深い！！』

『なにやつてんだ？彦？』

『へ？』

『おーっと早くもプールはアビキヨーカンの様を呈しております！どう見ます解説の』

『あひゃひゃひゃひゃひゃ！楽しげ！楽しげ！人間が右往左往して面白ーいっ！！』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『ぶはっ！』

『部長！っ！うまくお手玉が拾えません！』

『それに外れたらまた水の中に沈んじゃいます！』

『あー部長ちやう元部長元部長！（ちゅーかマジで難易度高いでコレ、なめとつただけど予想以上にハードな競技やん！こんな生徒会

の連中はどないしとんや) 「

「よっ

「くらせ

善吉と阿久根がプールから上がる

「ってうおおいっ！！ジブンらなに戦線離脱しとんねん！！」

「なにつて・・・ほら」

「その辺うるうるしてめだかさんの邪魔してはいけませんから」

「はあ？え・・・なに？黒神ちゃん？そないゆーたら黒神ちゃんはどこ行ったんや？」

「どこに？どこにですって鍋島先輩？どこにいたって同じですよ、反則と卑怯があんたの志なら王道と霸道がめだかちゃんの志！めだかちゃんはいつでもどこでもその志を貫いてる！！」

するとプールからめだかがお手玉を大量に持って上がってきてお手玉を

『おっおおおおおおおおおおっ黒神めだかつ！お手玉をつ！一気に入！まとめて投げ・・・！』

まとめて一気に投げカゴに入れる

『はっ入ったアアアッせっ生徒会執行部！なんと一気に20ポイント獲得だぁーっ』

他の選手は啞然とする

『すごい・・・！しかもあんな滅茶苦茶な投げ方で・・・！』

『いやあれで正しいんだよ、さっき言った玉入れのテクってことなんだけど1球ずつ投げるよりいくつか固めて投げるほうが効率がいいんだ、タマがでかけりやマトは狙いやすいし重力と慣性が働くからね上に投げる分には意外とバラけないんだよ、それでも20個つてのはあたしでさえ聞いたことないし、なにより今までずっと潜ってた肺活量の方が驚きだね！さすがはさすがの生徒会長ってところかな！』

『なるほどー！しかし解説の不知火さん、今それ言ったらみんな真似しちゃいません？』

『あ』

ピピイイイイイ

『終ー了ー！それまでーすー！』

第20話 「短っ！そして浅っ！！」（後書き）

彦『俺空気！！』

作者「仕方ないだろ原作に沿わずとオリ主の影が薄くなるんだから」

彦『ちつくしよっー！！』

第21話 「生徒会じゃないけどね」(前書き)

あらすじ「主人公のセリフ1、2回(泣き)」

第21話 「生徒会じゃないけどね」

「うーんほぼ横並びになってしまったな、順番によるポイントも考慮すべきだったか？」

「なアにこれくらいの方が盛り上がっていいですよ、むしろ俺は生徒会がぶつちぎる展開の方が怖かったですし、めだかちゃんの空気の読めなさは本気でデビルですからね、勝負事になったら手が抜けねーんだから、主催者がトップじゃ不公平感は否めませんしそういう意味じゃ不知火に感謝ですか」

「いや善吉、不知火に感謝する必要などない」

いつの間にか善吉と同じポーズを取っているめだかが後ろに

「（俺はもうオドロかない）こういうことだよめだかちゃん」

「どの道私達はトップではなかったのだあやつらを見よ」

めだか、善吉、阿久根は競泳部の三人を見る、そしてめだかはこの続ける

「密やかにしかし軽やかに誰にも気づかれることなく、しかし誰よりも速く私達よりも先に20ポイント獲得した者達だ」

「（競泳部・・・！不知火の言ってたトビウオ三人衆か！しかし三人がかりとはいえめだかちゃんよりも速いだと！？）・・・あれ？彦は？」

「その頃のわれらが主人公は」

ぷかぷか

水に浮かんでいた・・・

ありがとう主人公！さよなら主人公！君のことは忘れない！！！！

『殺すなーーーーー』

なんだ生きてたのか・・・

『ナレーションだろアンタ普通に話すな！！』

ちっ！

『もう黙ってくれ・・・』

（ここからはモノログに戻ります）

『では続いて二回戦に参りましょう！第二種目は水中二人三脚で！
つす！！』

箱庭学園特待生主制度についての解説

教育熱の強い箱庭学園理事会は日本津々浦々から数多の特待生を迎えている

具体的には十組以上の生徒は全員が特待生！

学費免除は当然のこと彼らは学園生活において各種便宜が図られている

1 / 2 / 3 / 4組 普通科

5 / 7 / 9組 体育科

6 / 8組 芸術科

以下特別科（特待生）

10組 特別普通科

11組 特別体育科

12組 特別芸術家

13組 特別

らしいよ この前袖ちゃんに教えてもらった

『増額部費争奪！部活動対抗水中運動会！第二回戦！水中三人四脚です！！この競技もルールはいたってシンプル！各チーム代表者3名が足を紐でがつちり結んで50mプールでかけっこしていただきます！！1位でゴールすれば15ポイント！以下2位14ポイント3位13ポイント・・・と続きます！最下位16位の0ポイントは避けたいですね！』

「いいかい人吉くん白水くん確かにイベント主催者である我々生徒会がチギってしまうのはよくないけれどだからといって真剣勝負で

手を抜いていいということにはならなんんだよ?」

俺は生徒会じゃないけどね・・・

「ええ勿論!やるからには全力を尽くしましょう!俺が二人のペー
スに合わせますから!」

『俺も二人についていけるよう頑張ります!』

俺と善吉ちゃんの目がキラキラ光る

そして高ちゃんはそんな俺達の言葉を聞いてじーんとしながらこ
う言う

「そうかそうか!これは人吉くん達に対して愚問だったな!俺は出
来のいい後輩を持って幸せだよ!」

「こちらこそです!さあでは!例によって生徒会を執行しますか!
『俺生徒会じゃないけどね!』

「おうとも!ともすれば個人主義に走りがちな今時の高校生達に俺
達の団結力を見せつけてやろう!」

善吉ちゃんと高ちゃんは握手しながら言う

『位置についてよおおおおい・・・どんっ!!あーっ!と生徒会が
いきなり飛び出したあーっ!・・・っ!・・・っ!・・・っ!・・・っ!
言うかこれは三人で協力してると言うより二人で競争しています!
しかも白水くんは完全に引っ張られています、何やってんだアこの
二人いーーーーーっ!!』

続く三回戦は『ウナギつかみどり』1匹1ポイント、各チームより
一名参加の競技

競泳部の一年生エース喜界島は13匹捕まえて13ポイントゲット
生徒会は会長ちゃんが参加、スキル『動物避け』発動、0ポイント

てかまた俺空気・・・

ちなみに最終競技は袖ちゃんが決めるらしい・・・

第22話 「俺はどつした」(前書き)

あらすじ「ブクブク」

第22話 「俺はどうした」

『部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは果たしてどのクラブとなるのでしょうか！では解説の不知火さんルール説明をお願いします！』

『はいはい！この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんです！』

『袖ちゃん気に入ってるでしょ・・・それ・・・』

『えっ！？あれ！？白水くんいつの間に！？』

『今さっきです』

実はスキルを使った・・・「無歩ノープラン」っていう

行きたい場所をイメージして少し歩くと着くっていう方向音痴さんにはいいスキルだね

しかも少し歩くとだから使うだけでショートカットになるのだ

『さっ！袖ちゃん続き続き！』

『はいはい、ま、構えなくてもフツの騎馬戦だよ、八チマキの奪い合い！八チマキ取られたり騎馬が崩れて水中に落ちたりしたら失格です たっだしー！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなのでここでクイズ番組的な救済ルール！』

『あれ？集めた八チマキの量ではなく質で決める的な？』

『そうそう 上位のチームほどポイントを高く設定します!! 体的には現在1位のチームのハチマキは16ポイントですが! 最下位チームのハチマキは1ポイントにしかありません!』

『なるほど、つまり上位チームほど他チームから狙われやすいということですね?』

『そういうことー』

「カツ! 最後まで盛り上げてくれるじゃねーか、さすが俺の親友は考える事が違う! 大好きだぜー不知火ーっ!」

『イエー! あたしもあたしが大好きー!』

『俺はどうした善吉ちゃん!』

()()(仲が良過ぎて気持ち悪過ぎ・・・!)()()

すると会長ちゃんが善吉ちゃんの後頭部を殴る

「・・・貴様が誰を好きだろうと自由だがしかし生徒会としての本分を見失うなよ人吉善吉!」

「ぼ・・・暴力をふるった・・・」

「細かいルールなど二の次だ! 倒すべき相手はそこにいる!」

『あれ? 袖ちゃん・・・競泳部の皆さんがこっち見てるよ?』

「んー? あれでしょあたしの狙いに気づいたとか?」

「狙いですか・・・?」

『？』

「これはねー生徒会と競泳部をぶつけるルールなの」

えーとここはなんだっただけ・・・えーと

生徒会は競泳部のハチマキをゲットすると1位に

競泳部は生徒会のハチマキをゲットすると2位との差は15ポイント
その状態で2位が3位のハチマキをゲットしても競泳部との差は1
ポイント

つまり安全圏・・・あつなるほど・・・そのためにぶつけさせる挑
発ルールか・・・

ん？会長ちゃんが扇子で競泳部の方を指差してなんか言ってる・・・
なんつってんだろ・・・

あつなんか競泳部の喜界島が恐ろしい表情に・・・

『それではラストバトル！位置についてよーい・・・どんっ！！』

おっ！挑発が通じたのか生徒会と競泳部が組み合った！

互角？いや足場の問題か・・・何気にチームワークいいな競泳部
ん！？またなんか言ってる・・・なんつってるか聞いてみるか！

「パティンクルリス半身半技」発・動！これで耳を強化！
えーと・・・

「やはり貴様達はすさまじい敬服に値する私はすさまじい人間が大
好きだ！」

「ハッ！何よ今更、人のこと金の亡者呼ばわりしといてさ！」

「亡者ではないかここまでの貴様達の戦法はあまりに命知らずだ」
命よりも金が欲しい」？よくもそんなことをいつてのけた！私はそ

の発言を許さない貴様達は金に溺れている！！」

「ぐっ……だ……黙れ！あんたなんか何がわかる！！お金がなかったせいであたしのお父さんは蒸発したぞ！お母さんは働き過ぎて身体を壊した！屋久島先輩のご家庭はお金がなかったから離散しちゃったし！種子島先輩の育った養護施設はお金がなくて潰れたぞ！誰がどー考えても！お金は命より大切じゃん！！あたしは命よりもお金が欲しい！！命知らずで大いに結構！お金のために死ねたら本望だ！お財布落としたら誰でも悲しむだろうけどあたし達が死んでも誰も悲しまないよ！！」

あっ！会長ちゃんが押し飛ばされた！しかも騎馬も崩れ　　！善吉ちゃんが何かを投げた！？

「甘えたことを抜かすな！たとえ貴様達が地獄のように不幸でもそんなことが命を粗末にしている理由になるか！！金が大切だと言う割りに随分高い買い物をしたものだな喜界島同級生、貴様は私の怒りを買った！」

！！……水の上に立って……いや！あれは！善吉ちゃんのヘルパー！？

「別に俺は勝敗とかどーでもいいんだけどなけど今のはさすがに俺も力チンときたぜ、だから珍しくけしかけてやる、やつちまえめだかちゃん！水中戦はともかくとして空中戦ならお前の十八番だ！」

そのまま会長ちゃんは喜界島のところまで一気にジャンプして！

騎馬から離す

えっ！？なんで……

なんでキスしてんの!!!!?
いや凍っじゃねーよ!!!

しかもいいこと言いながら八チマキとってるし……これは両者同時に着水……
でもヘルパーの上はまだ水上……つまり最後の攻防は有効……か生徒会はこれで1位に

ピピイッ

ここでホイッスル全競技コレで終了か……優勝は

『優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム!おめでとっございます!!』
は?

『えー柔道部チームは生徒会と競泳部がごちゃごちゃ戦っている間に!なんとその他の全チームを気付かれないようにこっそり撃破!合計103ポイント分の八チマキを獲得しぶっちぎりのトップと相成りました!!』

え~~~~?そんなのアリい……?

まあその後増額した柔道部の部費はナベちゃんが適当に分配したらしい……

そして生徒会后日行くと

「荒稼ぎに来ました無駄遣いしたら売り飛ばしますですのでそのつもりで！」

なんか仲間になってる

「ちなみにレンタル料は1日320円！」

凜っ！

『「「驚きのお値段っ！」「」』

第23話 「これだ！1、2、3！」（前書き）

あらすじ「主人公の立ち位置完全にヤム〇ヤ・・・」

第23話 「これだ！1、2、3！！」

「やあ！前回までやってた水中運動会でまったく出番がなかった白水しみず弓彦ゆみひこだよ！

「実はここ数日の間色々あったんだけど」

「ある巨大な権力を持つものによって

スキップ！！・・・されました

「ちなみにその権力を持つてる人はさくし
手く読めない」

（文字が汚れて上

「何をブツブツ言っているのだ？彦・・・」

「なんでもないよ会長ちゃん、で？何の話？」

「うむ、今、今日の各々の仕事を決めていたのだ」

「じゃあ俺は校舎の補強だな」

「では二年校舎の窓拭きですね」

「じゃああたしはポスター貼りにする」

「うむ、そうかでは、私は音楽室の防音設備の修復だ、彦は

「

『うん、ちょっと待て！』

「どうしたのだ彦・・・？」

『何回言ったかわからんが・・・俺は生徒会じゃない！！』

「「「え？そうだったけ？」「」」

え！？善吉ちゃん！高ちゃん！もがちゃん！チラッと見るだけわかるよね！？

へ？もがちゃんって誰かって！？あれだよえーと・・・喜界・・・じ・・・ま？だよ！

『まあっというわけで俺は屋上で昼寝する！』

「ふむそうか残念だ」

何気に残念を強調したね・・・

『んじゃ！そういうことだ』

そのまま俺は生徒会室を出て屋上に向かう

いや〜屋上っていいね

風が気持ちいいし空気がおいしいし

そして・・・風が気持ちいいし！ん？はい！何も思いつかなくて適当です！

いや〜作者の学校は屋上は入れないからな〜どや顔が出来るぜ！
といっても小説だからどや顔はわからな

P i r i r i r i 電話か・・・相手は・・・会長ちゃんか

『は〜いどーもー白水弓彦ちゃんでーす！』

《緊急事態だ》

『はい？』

《風紀委員会が貴様らを狙っている》

『ほう』

《私では善吉たちを助けるので精一杯だ》

『だから自分の身は自分で守れと?』

《そつだ・・・》

『わかつたあ』

ガチャツ！プープープー

『なるほど』今は2巻のあそこか・・・ん?』

なんか後ろに人の気配が・・・

『だ〜れですか』

「ギクツ！」

『風紀委員の人すか?』

「そ、そつだ！お前をつぶす!!！」

『そつか〜じゃあ訓練と思つて頑張るか』

つか人につぶすつて言つつてどつう教育を受けてきたんだ?

〜3分後〜

『あたんね〜な』

「くつ！コノ！コノ！」

はーい今絶賛避けてるよ

ちなみに相手の武器は・・・何アレ？
なんかあれ手につける硬いもの・・・

今は「バトインクリス半身半技」で目を強化して攻撃を見切ってるんだ！
でも目が疲れるし〜やっぱお気に入りのアレだ・・・いや！

これだ！1、2、3！！「マインドクール冷たい心」！！

これ気に入ってるんだよねー

これの真価を發揮してやるぜ！・・・次回に・・・

第23話 「これだ！1、2、3！！」（後書き）

彦「無理矢理終わらせたね」

ちよつと作者の都合が悪くて・・・無理矢理終わらせました
少し短い・・・

次回はもうちよつと上手く書きます！

第24話 「俺、弱・・・」 (前書き)

あらすじ「屋上行ける学校って少なくなね？」

第24話 「俺、弱・・・」

「マインドクール
冷たい心」

作中で何回か使ったけど一応説明！・・・一言で

どんな事にもクールになれるスキル！！

一見「何の意味があんだよ」と、思うかもしれないが

実は違うのだ！

どんなことにもクールになれるということはどんな精神的ダメージも平気だし

どんな攻撃も冷静に攻撃を見れば冷静に対処できる！

どんな状態からでも冷静に次の動きに入れる！

そしてどんな相手でも動きを観察して次の攻撃がわかる

実は無敵のスキルなのだ！！！！

でも口調がクールになっちゃって解除したらなんか恥ず

ちなみにここまでの思考時間10秒

ちなみに攻撃をかわしながら説明してまゝす

というわけで発・動！！

.....

「このー!」

風紀委員は遂に自棄になったようで拳を狙いも定めずに連続で振る俺はそれを冷静に観察して次の動きを予測しながらよけ続ける

「このやるー!」

風紀委員は右足を使って蹴ろうとする

でもダメだな・・・

足を使うことは自らのバランスを崩すという事だ

そんな状態でも平気なのは足で戦うのに慣れてる善吉やめだかぐら
いだろう

俺はジャンプして右足の攻撃をかわし

俺の右足で風紀委員の左足首を蹴る

当然風紀委員はバランスを崩し倒れる

俺は倒れた風紀委員の両手を掴み

手に付いた物を無理矢理取る、そして

『俺の勝ちだな』

と、言う

「く・・・くそ!」

『じゃあな・・・』

そのまま俺は屋上を去ろうとする

「・・・ふっ・・・ははははは！敵に背中を見せるなんておろか
ぐはっ！」

うるさくて後ろから攻撃しようとしたから殴った

敵に背中を見せることが愚か？ちがうな見せても平気だから見せた
んだ

風紀委員が気絶したのを確認し俺は今度こそ屋上を去る

（生徒会室前）

どうしよう・・・生徒会室来たのはいいけど

この後ここ爆破されるじゃん！！！！

どーするべきか・・・

注 「冷たい心」マインドクールは解除してます

ガラッ

へ？

「何をしている？彦」

『あ・・・会長ちゃん・・・』

「ちようど呼ぼうと思っていたのだ、入れ！」

ぎゃああああ危険地帯に入らされてしまったー

しかもその30秒後

会長ちゃんの弾いたスーパーボールが顔面に直撃した

その直後

パチパチパチパチパチ

「いやーお見事お見事！一年以上そのテクで　ん？てめえは・・・

」

『どーも初めまして白水弓彦（しみずゆみひこ）です雲仙先輩』

「あ？なんでオレの名前知ってたんだ？」

『え！？えーと・・・』

「ケツ！まあいい」

自分で聞いたくせに・・・

「ま、でも正体が割れたらそれで終わりな子供だましましたよ」

そう言つて雲仙先輩は袖から大量のスーパーボールを出す

あれ？やばくね？このままじゃ爆発する！！

「・・・何このヒネてそーな子供全然可愛くないんだけど」

(喜界島さん空気読んで!!)

(もがちゃん空気読んでよ・・・)

はっ！よくかんがえたら会長ちゃんに伝えれば助かるんじゃない！

『会長ちゃん！これ火薬だ』

「うるせえ！」

『ブツ!!』

スーパーボールを脳天に二つぶつかる

その痛みで意識が途切れかける

俺、弱・・・

そして意識がハッキリしてくると

復活早や・・・約1、2分かな・・・

「貴様達離れる！さっきこやつがバラ撒いたのはスーパーボールではない！火薬玉だ!!」

「おっとバレたかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！手品下手過ぎ！だがまあ遅い仕込みはギリギリ終わってる」

えっ!?!嘘!!もうここ!?!くそっ!こつなったらヤケだ!!

『会長ちゃん！会長ちゃんは爆発を弱めて！善吉ちゃん達は任せて

「!!」

「!!……わかった任せたぞ!!」

そして雲仙先輩は取り出したマッチに火をつけ

爆発を起こす

第25話 「私が本気で殴っても!」 (前書き)

あらすじ「主人公は弱さもヤム〇ヤ並」

第25話 「私が本気で殴っても!」

自分の上にある瓦礫ほ蹴っ飛ばし出てくる雲仙冥利

「ケツ! 風紀委員会特服『スノーホワイト白虎』 ダンプにはねられてもへっちゃらだっつー触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だ、ド深海で作業する潜水艦とかで使われてる素材なんだが重くて動きづらい難点だな! かし」

雲仙は爆破された生徒会室を見渡す

「思ったより被害が小せえな、そりゃ校舎全壊とまではいかなくてもこの辺一带消えてなくなってもよかつたはずなんだが」

すると雲仙は足元にある火薬玉を見つける

(不発弾 . . . ? いやオレが管理してんだぜそれはありえねえ . . . じゃあ?)

雲仙の頭に着火する直前を思い出し確信する

「(ああ、なるほどね、あの女手近にあった花瓶の水をぶち撒けて着火直前に火薬玉をいくつか濡らしやがったのか) 火いつける前に水びたしにされちゃー不発にもなるわな、そして窓ガラスが不自然な割れ方をしているぞ、どうやら溶ける前にすでに割れてたみてーだな、爆破の瞬間蹴り出された火薬玉も相当数あるってわけだ、抜け目ねっつーのか如才ねっつーのか、一瞬の判断でよくそこまでするもんだぜ、けどまあそんなの所詮は焼け石に水」

爆風が晴れてきて雲仙は人影をみる

そこにはボロボロの生徒会メンバーとそれ以上にボロボロの白水弓彦がいた

「なっ・・・何イ・・・!? 黒神! テメー一体何をした!？」

『簡単なことですよ雲仙先輩・・・』

「て、てめ! 白水! ! てめーそんな怪我してなんで生きてる!？」

雲仙先輩がおどろくほど俺は大怪我している

『爆発の恐ろしさは熱より爆風ですからね、でも爆風を受けなければ大したことはない、だから俺は善吉ちゃんと高ちゃんともがちゃんを壁際に押しして俺が盾になって爆風が届かないようにしたんですよまあ会長ちゃんは爆発を弱めていたからモロに喰らいましたけど』

「・・・!!? (簡単に言ってくれるが何が簡単なもんかよ!、しかも二人共爆発をモロに喰らったってことじゃねーかよ! 部屋一つ吹き飛んでんだぞ!? こいつら本気の本気で正気じゃねー!!) ケケケケケ! いや本当スゲーわその聖者っぷり気持ち悪い! っ! テメーらのガンコな信念にオレはちよっぴり感動すらしてきたぜ! !」

『「・・・」』

「ケケケ! そんなでアレだろ? この期に及んでもどつらテメーは争う理由なんかねーって言うんだろ? 仲間もオレも傷つけずに済んで一件落着! めでたしめでたしハッピーエンドってことになるんだよな

」

「うるさい」

「！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・哀れなことだ、貴様もかつては人の善性を信仰する心優しき美少年だったに決まっている、情状酌量に値するだけのきっかけがあつてそのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしたら考えられん

しかし！だからと言って私は貴様を許さない！！」

会長ちゃんの放つ殺気に雲仙先輩は後ずさる

「雲仙二年生貴様の言う通りだ私と貴様はそっくりだよ私も貴様と同じで自分を正しいと思つたことなど一度もない、もっといい方法はなかったか、ちゃんと他人の役に立てているか、起こりうるすべての可能性を考えたか、誰かの悲しみを見落としてないか、気付かぬうちに易きに流されていないか、人を助けることに慣れてしまつてはいないか、いつだつて迷つてるし、いつだつて怖い、私は正しくなんかない、ただ、正しくあるうとしているだけだ！！」

「？わかんねーよ何言つてんだかおんなじじゃねーかそんなの」

「わからんか？私には貴様の言うような大層な信念などないと言つておるのだ少なくとも友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念など私にはない！！」

一歩会長ちゃんが雲仙先輩に近づく

「私の聖者っぷりが気に入らないんだつて？雲仙二年生、いいだろ

うならばがっかりさせてやるう、私が怒りに任せて暴れてしまっようなただのくだらない人間だということを見せてやるう!!」

「人吉クンめだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ?」

「中一の夏休み以来ですよだから三年振りですか」

「そうかい、そうだな、俺もあの頃はめだかさんのことを血も涙もない理想主義者だと思っていたよ」

「.....黒神めだかの真骨頂その?『乱神モード』!こうなったらもう俺でも止められねーよ雲仙お前終わったぜ」

「!!!ケケケ!人のコト勝手に終わらせてんじゃねーぞ、ボケ!!乱神だろーが魔神だろーが火山の前じゃ消し炭だぜ!!」

雲仙先輩は大量のスーパーボールを取り出し会長ちゃんに向かって飛ぶ

それを会長ちゃんは拳を雲仙先輩の腹に喰らわす

あまりの威力に『スノーホワイト白虎』でも威力を吸収しきれず雲仙先輩は吐血する

「ダンプにはねられてもへっちゃらな制服だつて?それを聞いて安心したつまり三発までなら大丈夫ということだよな、私が本気で殴つても!!」

第26話 「やり過ぎだ」(前書き)

あらすじ「ダンプの3分の1＝会長ちゃんのパンチ」

今回ナレーションになったりモノローグになったりします

第26話 「やり過ぎだ」

めだかに殴られた雲仙は数メートル飛ばされ校舎にぶつかる

「たいしてダメージがあるとは思えないがそのまま立ち上がれない振りをしておけ、今ならまだ許してやれるかもしれない」

フラフラになりながらも雲仙は立ち上がる

「・・・ケケケ冗談！痛くもカユくもねーっつーの！ノーダメージだよボケ！」

「そうかあくまでも戦争を選ぶか私も同じ気持ちだが、ならば私の理性がわずかでも残っておるうちに忠告しておこう、空手・柔道・合気道・日本拳法・ジークンドー・骨法・ムエタイ 私はありとあらゆる格闘技の指南を受けておるがその技術を貴様相手に使うことはない、何故ならそれらは人間が練り上げた崇高なる技術だからだ、衝動的な怒りに任せて使うようなものでは決してない
だから私はただの衝動的な怒りに任せて暴力に訴え人間ではなく獣のように貴様を撃つ！！」

「・・・ケツ、なーに言ってるやがる！そんなに言葉にビビらされるオレだとも思ってたのか！？（とは言え挑発に乗って屋外に飛び出してきちゃったのはマズかったな、スーパーボールにしろ火薬玉にしろオレの武器は基本屋内用！ひらけた場所じゃ威力も効果も半減だ！ここは一旦詫び入れて体制整えてから出直すって手もねーじやねーんだが）」

雲仙の頭に風紀委員達の顔が浮かぶ

「（・・・そうはいかねよな、こんなオレでも風紀委員会の看板背負っちまってんだ、風紀委員会は正義！ゆえにテメーを今この場所で取り締らねえ理由がねえ！！）いいだろう！テメーが獣のように戦うのなら！俺は人間のように戦ってやる！テメーの大好きな！俺の大嫌いな人間のようにな！！」

そして雲仙はめだかに向かって飛ぶ、それをめだかは意にも介さず再び雲仙の腹に拳を喰らわせる

雲仙はそのまま破壊された生徒会室に吹き飛ぶ

しかし雲仙はこれをあえて喰らったようにも見える

何かを企んでいることをめだかは察しそれでもとどめを刺すために歩を進める

そこに善吉が声をかける

「めっ・・・めだかちゃんっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私の主義に巻き込んで悪かったな貴様達、あとで腕章を返してくれこれから私は一人でやっていくことにするよ」

（！！まずい・・・！こりゃその？とか言ってる場合じゃねえ！このままじゃめだかちゃんがどこか遠くに行っちまう！！）

『・・・・・・・・どうする？善吉・・・ち・・・ゃん』

彦が倒れる

それもそうだスキルを持っているとはいえ身体能力は普通ノーマルだ
全身を大やけどをすれば気絶ぐらいするだろう

「彦!!」

「白水クン!？」

「しっかりして!」

〈数分後〉

意識がハッキリしてくる

鳴り響く轟音によって

その音は校舎を引き摺る音のように聞こえる

いや本当に引き摺ってるんだろう

『善吉ちゃん……』

「彦!? 起きたか! 大丈夫か!？」

『大丈夫大丈夫……会長ちゃんは?』

「あそこだ」

俺は善吉ちゃんが指差した方向を見る

『………すげ……けど怖え……』

俺が見たのは一言で言うと「化物」^{バケモノ}だ

「怖くて当然だ、あれが黒神めだかだ、人格をはがされてみればあの通りただの力の塊だ、さながら暴風雨のごとく周囲を根こそぎにするだけだ」

そして善吉ちゃんはこう続ける

「喜界島、阿久根先輩、彦、もしも引き際があるとするとするなら多分ここだけ、めだかちゃんのそばにいればこれからもずっとこんなことが続く、あいつにこれ以上巻き込まれたくないんだったら、あいつの言う通り確かに今が生徒会の辞め時だ」

『「「「！」「」』』

「防御は崩され、攻撃は通じずも、切り札はまるで切れやしねえ、情けねえ限りだが、オレにはもう何も残っちゃいねえ、しかしな黒神それでもオレはテメーに負けちゃねーんだ、なぜだかわかるかい？なぜならオレはテメーにちつとも心を動かされてねえからだ！テメーはオレを改心させることができなかった！それはテメーにとっちゃあ敗北だろ？テメーは確かにオレより強かった、ただそれだけだそれだけでしかねえ、正しかったわけでも優れていたわけでもねえ、他のすべてを手折られようとオレは信念を曲げやしねえ、オレは明日からも変わらず言い続けるぜ、オレは人間が大嫌いだ！！」

めだかは攻撃の態勢に入りながらこう言う

「そうか私は人間が好きだ、貴様は改心しないでいいよ、貴様に明日は来ないからな」

そのままめだかは拳を振りぬく

「やめるめだかちゃん、やり過ぎだ」

「あ？」

「もとより副会長には私に敵対的な者に就いてほしかったのだ、不知火には断られてしまったが、考えてみればここまで私と張り合った貴様は中々に適任ではないか！」

いつも通りの会長ちゃんだ・・・やべ・・・もう限界・・・

俺は誰にも気づかれなくらい静かに倒れた

（理事長室）

そこには見知らぬ老人と不知火がいた

「雲仙くんがしばらく戦線離脱ですか、困りましたねえ。『十三組の十三人』は一人でも欠けちゃダメなのに、このままでは私の計画が破綻してしまいますよ、どうすればいいと思います？袖ちゃん」

「どーもこーも！別に悩む必要なんかないっておじいちゃん、いやさ箱庭学園理事長不知火袴総帥！困った時は迷わず選ばず、目安箱に投書すればいいんだよ」

第27話 「フラスコ計画始動」(前書き)

あらすじ「主人公がカッコいいこと言っている!?!?!?」

第27話 「フラスコ計画始動」

（理事長室）

「雲仙くんとの小競り合いは大変でしたね黒神さん、理事会も彼の正義には手を焼いていたものですから正直言って助かりましたよ、箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください」

今喋ったのは自分で言ってる通り箱庭学園の理事長だ、名は不知火袴

「礼にはまったく及びませんよ不知火理事長、それより私としてはお孫さんの制御をお願いしたいものですな、恥ずかしながら彼女にはしてやられっぱなしでしてね」

こちらは原作の主人公黒神めだかだ、彼女とは不知火半袖の事だ

「ははは、無茶言わないでくださいよ黒神さん、袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々キミの幼なじみの人吉くんくらいですよ」

「………確かに」

理事長も半袖には困ってるようだ

「さて……それでは本題に入りましょうか目安箱に投書をしてまで君にこうして足を運んでもらったのは他でもありません、黒神めだかさん、君に折り入ってお願いしたい事がありますね」

その言い方からしてめだか目は目安箱の投書によって来たのだろう

「それは怖いですなああなたはあのお孫さんのご祖父でいらっしやる、
どんな無理難題をふっかけられることやら」

「まあそう構えないください、なあと簡単なお願いなんです、実
は雲仙くんは風紀委員長としての活動とは別に私の主宰するプロジ
エクトに参加してくれていましてね、ただ彼は今度のことでしばら
く静養しなければなりません、そこで黒神さんに彼の代役をつとめ
ていただきたいのです」

「プロジェクト……ですか？」

理事長はにっこりしながら答える

「私は便宜上それを『フラスコ計画』と呼んでいます」

「フラスコ計画……ですか……」

「黒神さん君はどうして自分が優秀なのか　疑問に思ったこと
はありませんか？」

「質問の意味をはかりかねますね、そもそも私は自分を優秀などと
うぬぼれたことを思っておりません」

「ははは謙遜する事はありませんよ、隠さなくたっていいんです、
君は明らかに異常なんですから！足捌きで分身する、新聞の内容を
細大漏らさず記憶する、フルマラソンを二時間フラットで駆け抜け
る、獰猛な獣をひとにらみで屈服させる、関数計算を暗算でする、
十代において赤帯を巻く、書の道を三カ月で極める、水の上に立つ、
校舎を素手で破壊する、どれひとつとっても人間には到底不可能な

「行いですが、通常では勿論！特例であるとなしえない！完全に異常アブノーマルの領域です！！」

「これは買いかぶられてしまったものですな、私の為すことなど恵まれた生まれにおけるただの鍛錬の結果に過ぎませんよ」

「そうですね優秀な人間ほど己の優秀さを努力や運や環境のせいにしたがるものです、まるで言い訳でもするみたいだね、では、黒神さん、ここでひとつ老人の実験に付き合っただけませんか？」

すると理事長はグラスに入ったサイコロを取り出す

「振ってみてください」

「わかりました」

めだかは八つのサイコロを振る

そして結果は

八つ全てのサイコロが積み重なる

「すみません昔からそうなんです私がサイコロをまとめて振ると、なぜか積み重なってしまうのです」

「……いえそれでいいんです、それでこそ君を誘う意味がある！フラスコ計画の定員は十三名、十三組の中から更に選ばれた『十三組の十三人』が計画を進めています」

「不知火理事長お話はそこまで結構です、申し訳ありませんが正式にお断りさせてください、失礼します」

そのままめだかは理事長室から出る

「フウ、強い子だ、強い強い、強過ぎて、弱点が丸わかりですねで、君たちはどう思いました？」

突如、理事長の後ろに6人の男女が現れる

「僕には理事長が言うほど大した奴には見えませんでしたけどね、サイコロ占いの結果には驚かされましたが、彼女、僕達がここにいるのも気付いた様子はありませんでしたし」

宗像形 所属 三年十三組 血液型 AB型 験体名 『ラストカーペ枯れた樹海』

「いやあ俺の見たところ気付いた上で無視してたっつー感じだぜえありゃ、とりあえず五回くらい殺してみようと思ったけど全部失敗しちゃったもん」

高千穂仕種 所属 三年十三組 血液型 AB型 験体名 『ハートラック棘毛布』

「いずれにしてもあの子が雲仙くんに勝てたのはただのマグレだと私は思うよ、まあでも私は好きだよああいう子」

古賀いたみ 所属 二年十三組 血液型 AB型 験体名 『ベス骨折トペイン』

り指切り』

「私は意見を有しない、思うことなど何も無い」

名瀬天歌 所属 二年十三組 血液型 AB型 験体名 『ブラックホウ黒い包イト帯』

「いいんじゃない？あれなら人数合わせくらいにはなるでしょ、結局ボクと王土がいればそれでフラスコ計画はなりたつんだし」

行橋未造 所属 三年十三組 血液型 AB型 験体名 『ラベットラビリス狭き門』

「うむあれだけの美貌だ、俺の視界に存在する事を許してやってもよからう」

都城王土 所属 三年十三組 血液型 AB型 験体名 『クリエイト創帝』

「ふふふ、いやはや、君達にかかっちゃあ化物生徒会長も形無しですな」

そこに古賀が話しかける

「ただで理事長さん私としてはあの子が計画に参加してくれたらいーなーって思うけど、誘いはつれなく断られちゃったじゃん、どうすんの？」

「心配いりませんよ古賀さん、もう二人候補がいます」

「理事長が目をつけるといふことは少なくとも僕達に匹敵するほどの異常アブノーマルなんでしょうね」

「ええ、面白い事にその人物は異常アブノーマルを何個か持ってるらしいのですよ
もう一人はデータが少なくいまいちですね」

「ふは！なるほど一人は奴か」

「ん？あいつ？誰の事だい王土・・・？」

「白水弓彦しみづゆみひこだ」

「おや？知っているのですか・・・しかし彼は今入院中と聞きました
がね」

「もう一人は誰ですか？」

「先ほども言ったとおり情報は少ないです」

「名前は？」

「
です」

第27話 「フラスコ計画始動」(後書き)

主人公が登場しないまま一話が終わってしまった・・・

もう一人の人物とはキャラの設定の募集で送ってもらった者を使います

名前が一番悩む・・・

第28話 「お断りします!」(前書き)

あらすじ「ついに主人公登場ナシ!?!」

今回は少し短めです

第28話 「お断りします！」

やあ！読者の皆さん！もう覚えたと思うけど白水弓彦しみずゆみひこだよ！

今、俺は退院したから家に帰るとこだよ！えっ！？「怪我もつ治ったの？」って？何のことかな

そんなわけで受付をすませて家に向かう途中に

「久しぶりだな」

都城王土・・・いやファラオが現れた

「いや白水くん・・・まだファラオって呼んでるの？」

『行橋先輩・・・心読まないくださいよ』

「えへへごめんごめん」

『で、なんか用すか？久々の家のベッドで気持ちよ〜く寝よつと思つたのに』

「理事長がお呼びだ」

『へっ？』

（理事長室）

「すみませんねえ、白水くん、退院直後に呼んでしまって」

『お気になさらず理事長、それで何のご用で?』

敬語つてむずかしくしかも行橋先輩とアラオどっか行っちゃうし
ん?理事長室、理事長に呼ばれた、退院直後〓急用
……なるほどね

「ええ実は私の主宰するあるプロジェクトに参加してほしいのです」
『お断りします!』

隣っ!

おっなんか凜っつて出そうとしたらだせた……字ちがくね?
なんだよ少し直したら「隣っ!」じゃねーか!!
……さて話を戻そう……

「な、なぜですか?まだ話してもいけませんよ」
『なーに簡単な事です』

俺は理事長の座ってるソファの後ろを指差す

『そこに人の気配がするんですよ、盗み聞きしてる人たちがいると
か気分悪い……』

「そうですね……皆さん出てきていいですよ」
すると4人の男女が現れる

「・・・どうやって隠れてたんだ？」

「へえ、俺たちに気付くとかおもしれー奴だな、あつ俺は高千穂仕種ってんだ」

『どーも、白水弓彦です』

「僕は宗像形・・・都城が目をつけるだけあるね」

『何故刀を持つてるんですか？』

「私は古賀いたみ君となら仲良くなれそうなのがするよ」

『そうですか俺もそう思います（露出狂だよ・・・）』

「私は名瀬天歌」

『よろしくお願いします』

「アラオと行橋先輩はいないのか・・・」

『どーやらこの先輩方がそのプロジェクトのメンバーのようですね』

「そうです、フラスコ計画それがプロジェクトの名です」

『フラスコ計画ですか・・・』

「やっぱりここか・・・」

「計画参加者にはそれなりの報酬がありますが？」

『参加したいのは山々なんですが・・・お断りしますよ』

「そうですか・・・残念ですね」

『他に候補はいるでしょ黒神めだかとか』

「いえいえ黒神さんには断られてしまっています」

『他に候補はいないんですか?』

まあいるわけ

「一人います」

え!?!いの!?!原作じゃいなかったはずじゃ・・・

『名前はなんですか?』

「
です」

『!?!?!』

「
どうしました?」

なんで!なんで!?!あいつが!?!?!?

く回想く

これは俺が元の世界で中学3年の時

第28話 「お断りします！」（後書き）

もう一人の候補の名前は決まってるのかじゃないですよ!!
あえて隠してるだけですよ!!

主人公紹介2（前書き）

そつえばスキルを一気に紹介できたら楽だな と思って
書いたらなんかアレな感じが・・・

主人公紹介2

名前 白水弓彦しるこゆみひこ

年齢 15。

性別 男。

特徴 白髪で球磨川のような顔立ち。

血液型 AB型。

癖 誰にでも「ちゃん」をつける。

性格 女好き、おふざけ大好き、自分大大好き。

異常

「冷たい心」
マインドクール

主人公の一番気に入ってるスキル。

自分を好きなだけクールに出来る。また体温も下がる。

自分をクールにすることで物事を冷静に見たり、冷静に考えたり、と応用がかなり利くスキル。

使い方によっては無敵のスキル。

主人公は気に入ってるが口調までクールになってしまふことは嫌がっている

「熱い心」
マインドヒート

作中未登場。

「冷たい心」マインドクールの真逆のスキル。

戦闘、運動向きスキル。

自分の気持ちを熱くするスキル。また体温が上がる。

怒ってる時などに使うと効果倍増。

自らを怒り状態、気を高めたりするスキル。

怒り状態や気を高める事で肉体、脳を活性化できる。

ただし動く時動きが単調になってしまう

「暴力以上の暴力」バイオレンスナックル

自分に暴力的な強さを与えるスキル。

肉体も強化される。

「無歩」ノーフラン

行きたいところをイメージして少し歩くとそこに着くスキル。

「疲れ知らず」アスリート

疲れないスキル。

ただし解除すると使ったときの疲労がすべて来る。

「半身半技」ハートインクリス

体の半身、または一部を強化するスキル。

「冷たい心」マインドクール同様応用の利くスキル。

「言霊の幸心人々」ことだまのさきはうひとびと

都城王土の「言葉の重み」と同種のスキル

「言葉の重み」同様電磁波も操れる。

さらに電磁波だけでなく本能に作用するスキル。なので回避できない。

過負荷 不明

主人公紹介2（後書き）

過負荷は前の主人公紹介といっしょに隠すことにしました

第29話 「気にすんな」(前書き)

あらすじ「回想シ〜ン！」

球磨川登場した時期ってこれであってるかな？

にしてもオリジナル話だと短い・・・

第29話 「気にすんな」

元の世界で1年前の中学3年の春と夏の境い目ぐらい

俺は3年に上がって数カ月後、友達がいなくなった

中学3年の春と夏の境い目といえばジャンプのめだかボックスで

球磨川楔が登場したころだ

その頃俺はなぜ友達がいなくなったかわからなかった

そんな時放課後学校でジャンプを呼んでいた時の事

そいつは現れた

【なにしてるの？白水くん】

『ジャンプ読んでる』

【ジャンプ？】

『これ』

ジャンプも知らないのかそう思いながら俺はジャンプをそいつに見せる

どうしてだろう・・・こいつのことがわからない・・・

そいつの付けている腕章は生徒会長のものだ

よく見れば女子版球磨川みたいで

俺に似た雰囲気を感じた

生徒会長の腕章を見て俺はめだかみたいだと内心わくわくしていたでも内心おかしいとも思った、なぜなら、俺がその生徒会長のことを知らないからだ

今思えば日之影空洞のようだ知らなかったのは・・・

【すごいねたくさん漫画があるね！】

そいつはジャンプのページをめくりながら話す

『おまえ漫画読んだことないの？』

【ん？ないな、小説ならたくさん読んだことあるけど】

『この漫画の原作者って小説家だぞ』

俺はめだかボックスをそいつが開いたところでめだかボックスを指差した

【えっ！？そうなの！？すごいねえー小説だけじゃなく漫画もやるんだあー】

キンコーンカーンコーン

平凡なチャイムの音を聞くと俺はカバンを持ち立ち上がる

『そつえばお前の名前は？』

【えっ！？えーと・・・そのー・・・】

そいつの顔が赤くなる漫画のキャラみたいに

どういふことが聞いてみると

【いや、あのだが単純に寂しくて】

はまた顔を赤くして涙目で言う

『はあ・・・』

恥ずかしがり屋で、寂しがりで、泣き虫で生徒会長の女の子
なんか本当に漫画に出てきそうな子だな・・・

これが俺の親友の一人 との出会いだった・・・

第29話 「気にすんな」(後書き)

は魁斗さんの考えていただいたキャラよアレンジしたキャラです！

ありがとうございます！

オリキャラ(の設定)はまだまだ募集中です

ユーザーじゃない人でもジャンジャン送ってください！

第30話 「改めて」(前書き)

あらすじ「主人公がなんか少し良いキャラに・・・」

第30話 「改めて」

俺が と出会って数日後

『おーい ちゃん！めだかボックスの単行本持って来たぞー』

【本当！？わぁ見てみたかったんだあー】

びっくりすることに俺と の漫画の好みはぴったりだった

俺の好きなめだかボックスなどの話が滅茶苦茶合う

は生徒会長らしく頭は良くて漫画をよく読んでて

俺には考えられないくらい難しい仮説を考えたりしてた

この子はすごいと俺は思ってたて実際仲良くしてて近づいてくる人は増えた

でも皆すぐいなくなった・・・

そんな時 に言われた事が衝撃的だった

【白水くんて球磨川に似てるよね】

『・・・は、はあ・・・』

【あれ？どうしたの？】

まあ実際似ている漫画で登場した時

『え？俺？』

と思ったほど似ている白髪の球磨川・・・俺にびったりだ

とりあえず返した言葉が

『うんまあ似てるよね』

だ

『そういえば・・・ ちゃん仲良いんだから”白水”はねえ

ーって』

【え・・・じゃあなんて呼べば】

『彦でいいよ・・・』

【えっ!!?!?えと・・・】

の顔が赤くなる

つかどこまでが恥ずかしくてどこどこまでが恥ずかしくないんだかわからん

【えーとじゃあ改めてよろしく彦くん!】

『おう!よろしく ちゃん』

その後もいろいろあって

「」どうしました?白水くん・・・」

『..』

理事長に話しかけられて我に返る

「ぼーっとしてますが大丈夫ですか？」

『・・・大丈夫です』

「その様子からすると　　さんと君は知り合いのようですね」

『ま、そんなところですよ・・・じゃあこれで失礼します』

そのまま俺は理事長室のドアを開け出て行く

「やれやれ二人とも断られてしまいましたね、もう一人の
さんとはどんな人物なのでしょうが」

『さうて　　ちゃんがいるのか、俺以外にもこの世界に来た人
がいるのか・・・』

旧校舎付近をウロウロしていると

「ん？おっ！彦！」

「彦ではないか」

ばったりと善吉ちゃんと会長ちゃんと遭遇した

『どうしたの2人も、こんなところに』

「あれ？覚えてねーのか？彦・・・この旧校舎
人は真黒さんだぜ」

『え……あーそっかー!』

「お前完全に忘れてたろ」

「私は忘れたいがな」

会長ちゃんがここまで言うんだ……

なんか最近めだかボツクスの話忘れてきたな

「まあよい、彦! 貴様も一緒に修業するのだ!」

『なんで!?!』

「人数は多いほうが良い!」

『はあ……』

到着!! 現在地軍艦塔ゴーストバベルの真黒とかいう人の部屋の前

『会長ちゃん……すっげえー! テンション低いよ』

「めだかちゃん……頑張ってくれ」

「う、うむ」

ガチャ

「やあやあよく来てくれたね、ようこそだ一年ぶりだぞ愛しの妹めだかちゃん!」

その部屋は写真、フィギュア、人形、パソコンのディスプレイまで
会長ちゃんだ

うん気持ち悪い・・・うん帰ろうかな・・・

ガシッ

『へ？』

「「逃がさん！」「」

前にもこんなことあったような・・・

なんで・・・

『なんで俺はいつも巻き込まれるんだあー！！！！』

第31話 「素がわからん」 (前書き)

あらすじ「ついに真黒^{へんたい}現る！」

サブタイトル微妙だったので変更しました

第31話 「素がわからん」

「やあ！前回までやってた回想では「冷たい心」マインドクール使わなくても結構クールだった白水弓彦しみずゆみひこだよ！」

「今は会長ちゃんの変態おにいさんに会いに来たんだ！」

「名は変態くろかみまへうざんだ」

「え？字が違う？気にすんな」

「では本編の続きをどうぞ！」

「まったくもう！僕がこの軍艦塔ゴーストバベルに住み込みで働いていることを知りながら随分と遅い挨拶じゃあないか！お前は昔からお兄ちゃんに対する礼儀がなくなってないんだよ、僕はこんなにめだかちゃんのことをこんなに愛してると言うのにね！」

「前回も言ったが今いる部屋には会長ちゃんの写真、フィギュア、人形、他にもアルバムなどがある」

「気持ち悪い……吐きそう……いつそのこと吐きたい……」

「彦……わかるぞ……」

『会長ちゃん！』

「共感できる人がいて嬉しくて俺は涙が出そうになる……
そこに善吉ちゃんが水をさす」

「(めだかちゃん！ほら笑顔笑顔！)」

「(う、うむ)・・・ご無沙汰しておりますお兄様、挨拶が遅くなつてしまったことをめだかは本当に申し訳なく思っております、でもお兄様も少しは実家にお顔を出されたらいかがですか？お父様もお母様も大変心を痛めてらっしゃいますよ？」

うん俺でもわかるすげえ無理してる・・・笑顔だけど微妙に顔引きつってるもん・・・

すると変態は1歩1歩会長ちゃんに近づき

「お父様？お母様？そんな奴らは知らないね

お兄ちゃんにはただ一人妹おまえがいればそれでいい」

ハグをする・・・そして

ゴッ！ ドオーーン！！

会長ちゃんは一瞬で乱神モードなり変態をぶん殴る

うん！ナイス！！会長ちゃん！！！！

「めだかちゃん！気持ちわかるが落ち着け！真黒さんにお願いがあつて来たんだろ？」

会長ちゃんは善吉ちゃんの言葉を聞き乱神モードから戻り

「別にお兄ちゃんにお願いがあるわけじゃないんだからね！」

『「（シンデレレ!?!）」』

「お願いを聞いてくれないならお兄ちゃんの全身の骨を折り畳んでやるんだから!」

『「（ヤンデレ!?!）」』

「ではなく殴ってごめんなさいお兄様、めだかをお願いを聞いてください!」

『「（素直クール!?!）」』

「・・・キャラが崩壊してる・・・」

『会長ちゃんの素がわからん』

「ふむふむなるほど弱くなったねめだかちゃん」

『「!?!」』

「全体的に筋肉量が落ちているなまけてる証拠だ、筋肉の質も中学一年生の頃の半分以下だな、頭部に擦過傷があるようだけど昔だったらそんな傷30分もあれば完治しただろう、拳を振り抜く時に左脇腹をかばったよね、あばら骨でも痛めているのかい?肌ツヤから見るに睡眠もまるで足りてない、身長が伸びているのに体重が変わってないぞ、栄養管理がおろそかになっていると見える、生徒会長になって忙しいんだろうけどめだかちゃん、自己修養がちょっぴりお粗末になっているんじゃないのかい?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

(・・・すげえ軽くハグして一発殴らせるだけでそこまで見抜くか、マジで相変わらずだぜこの人、さすがは伝説の分析家マナージメンアナリストトの天才魔法使いとまで呼ばれたトレーナー黒神真黒！)

「あはは！それに比べて善吉くんは随分鍛えてるみたいだねー、その筋肉は触らなくても見ればわかる！いや見違えたよ、がんばってるみたいじゃないか善吉くん！」

『真黒さん！俺は？』

「ん？君は・・・ああ！弓彦くんだね！・・・あまり変わってないけど・・・」

『けど？(つか初めて弓彦って呼ばれた)』

「纏ってる雰囲気が変わった・・・どうやら異常アブノーマルに目覚めたみたいだね」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「何話してんだ？彦、真黒さん」

『「なんでもないよ善吉ちゃん(くん)」』

「仰る通り言葉ありませんお兄様、めだかはすっかりなまってしまいました、ですからここに来たのです、今の私より強くなりたいお兄様、めだかを鍛え直してください！」

『愛する妹の頼みですよ？真黒さん？』

「……めだかちゃんと言彦くんがそこまで言うなら、まあいいかな」

「それだけではありません、ひとつご質問したいことがあるのです、フラスコ計画についてお兄様が知っている限りのことを教えていただきたい」

「フラスコ計画？なにそれ？理科の実験か何かかな？」

「とぼけないでくださいお兄様、体に聞かなくてはいけなくなる」

『会長ちゃん……それごうも　バキッ……痛い……』

俺は真実を言っただけなのに！！
まあいいや

『ようするに、元十三組生で優れた異常アブノーマルの持ち主の真黒さんならフラスコ計画を知ってるかもってこと？』

「そつだ」

「……めだかちゃんってゲームとかしないよね？」

「は？」

会長ちゃんがマヌケな声を出した……レアだ

「まあ聞いてよ僕はRPGとか大好きでさ、それもやりこみ系っつか、どんなへボいキャラでもレベル99まで育てないと気がすまないんだよ、要はレベル99萌えなんだよね、アナリシスもコンサ

ルトもマネージメントもその手段でしかないお前と違って何のスキルも持ち合わせていない僕にしてみれば他人をマックスまで育てるのが楽しくて仕方ないんだ、だから人為的に天才を作り出そうとするフラスコ計画は僕が熱中するにはうってつけのゲームだった、お察しの通り僕はかつて『十三組の十三人』サーティンパーティの一員だった、マルチトレーナーとしての能力を高く評価されてね、もつともメンバーとソリが合わなくてすぐに辞めちゃったんだけどね？」

長いセリフを言い終わると真黒さんは上着を脱ぐ

そこには手術跡があった

「腎臓一個、左側の肺、肝臓の半分、胃の四分三、心筋の二割、動脈五本、静脈三本、それがフラスコ計画を抜ける為に僕が提供した代償だ」

『……………つ！！』

「おつと筋違いの同情や逆恨みはやめるよ二人とも、僕は納得したこうなつたんだしこの結果にも満足してる、この世の地獄を見れたんだ、内臓を全て失くしても鑑賞料としては安いくらいだよ」

『とんでもないっすね……』

「そんなわけでねだから僕はフラスコ計画の内情を少なからず知っているだけだめだかちゃんには絶対に教えない、お前に僕と同じ目に遭ってほしくないからね！

僕の心におつ立つ三本柱は友情・努力・勝利じゃない、妹・妹・妹だ！

妹萌え！いつだってそれが僕の唯一の行動原理だ！僕は妹おまえから尊敬

されるために生まれてきた！

だから僕はお前にフラスコ計画については何も教えない、だけど僕はお前にそれ以外の全てを教えよう、止めても無駄なことはわかっているからお前をレベル99まで育て上げてやろう！

妹育成のシミュレーションゲームだ！」

「・・・まあ鍛えてくれるのはいいとして・・・めだかちゃん都城とのデートは明日の朝だろう？」

『よく分らんがたった一晩でレベルマックスのなれるか？』

「おいおい何を他人事みたいに言ってるんだい善吉くん、弓彦くんきみ達もがんばるんだよ？」

『「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」』

「言っただろう？きみがこれまでどれほど鍛えてきたかは見ればわかる、昔心無いことを言っただけで悪かったね、よくぞ挫けずずっとめだかちゃんのをばにいてくれた、一緒に強くなっただけから僕の大切な妹を守ってやっておくれよ・・・弓彦くんも頼むよ」

え！？あれ！？これ断っちゃあいけない雰囲気！！？

「カツ！仕方ねーなあまったく！真黒さんがそこまで言っただけ付き合っただけでめだかちゃん！なっ！彦！！」

え！！！？もうこれ完全に断れねーじゃん！！

『わかったよやるよ！！』

「それじゃあ早速始めようかな黒神真黒プロデューサー！化物マネー
ジメントのコーナー！まずはコースを選択してくれ
Aコースはありとあらゆる苦痛を全身で経験する悪魔も泣き叫ぶよ
うなハードトレーニングでしかも効果と命を保証できない
Bコースは寝て起きたら最強になってる、さてどっちのコースがお
望みだい？」

「「Aコース！！」」

「え？俺はBコースが・・・」「Aコースだよな？」「はい・・・」

第31話 「素がわからん」(後書き)

こゝ、今回長過ぎ……3000文字越え……

第32話 「ちなみにかよ」(前書き)

あらすじ「雰囲気って怖いね」

・・・このあらすじ意味あんのかな？今更だけど・・・
サブタイトル入れ忘れました！

っていうか最近他の作品の影響強い・・・

第32話 「ちなみにかよ」

黒神真黒の修行から十二時間後

七月十五日午前六時

箱庭学園 時計塔の屋上

たった一人で都城王土を太陽を眺める
そして話しかける、現れた3人に

「地球は俺にとって小さ過ぎる、太陽でようやく偉大なる俺に匹敵しようだから俺はこうして欠かさず日の出を眺める、立ち昇る太陽を見つめることで都城王土という己の姿を確認するのだ、愚民どもは毎朝鏡の前で身だしなみを整えるだろう？それと同じだ、太陽は俺にとって鏡なのだよ

待ち合わせにこんな早朝を指定したのはそのためだ、黒神めだが、俺の妻になる者として俺に太陽の姿を見てほしくてな」

すると王土は後ろを振り向くそこにはめだか、善吉 と・・・
誰？

『おいナレーションぶっ飛ばすぞ・・・』

主人公がいた・・・ちなみに全員ボロボロだ

『ちなみにかよ』

ナレーション・・・殴りてえ・・・

さて話は戻って会長ちゃんが話している

「だがすまん、私には鏡を見る暇も身だしなみを整える余裕もなかったよ」

「ふむ、定刻丁度に到着するその几帳面さに免じて身なりについては大目に見よう、しかし男連れというのはさすがに容認できんな、それも2人か・・・、偉大なる俺とのデートだというのにお前は礼儀というものを知らんのか」

「生憎、女としてここに来たつもりはない、私は生徒会長として来たのだ、サーヘティンパーティー『十三組の十三人』の一人都城王土！フラスコ計画の概要を教えてもらおうか」

元気だな・・・会長ちゃん・・・

『というか会長ちゃん・・・妻とかデートとか何があったの？』

「彦・・・お前KYだな・・・」

『善吉ちゃんには言われたくないよ・・・』

「なに!?!?」

『善吉ちゃん』

「なんだよ!?!?」

『来るよ・・・』

「まずはとりあえず」

『跪け』

善吉ちゃんと会長ちゃんは「言葉の重み」を受けるが耐えている

俺？俺「言霊ことだまのたまはつひんごの幸あゆみふ人々」あるから平気だし

「……ほう？俺の圧政おしほに逆らうとは面白い、今度は本気で行くぞ

『平伏せ』

「嫌だ！！」 『嫌です』

凜ッ！！ 隣ッ！

「言葉の重み」は電磁波を使うスキル……それに逆らったせいかバリバリバリと音がする

ん？あれ！？また凜ッの文字が違う！！なんでまた「隣となり」なんだよ！しかも「！」の数も少ない！！

「……ふはっ！これは驚いたなお前達に一体何があった？地獄巡りでもしてきたのか？一人は温泉でも行ってきたようだ……」

なにそれ！？俺だつてポロポロだよ！……なんで温泉！？

「昨日と今日とでまるで違う生き物ではないか！俺の圧政おしほに逆らえる者などこの学園に五人いるかいなかだぞ？」

「そうか、ではこれで八人になったな、なに優秀で変態なコーチの下で徹夜したただけだ、何のこともないただの努力の結果だよ」

「変態……？ああ！黒神というその名字！お前さては黒神真黒の妹か！」

「！！」

「そうかそうか得心いったよ魔法使いと異名を取ったあいつならば猫を虎にするのに十分過ぎるで、それがどうした？」

ファラオ
王土の雰囲気が変わる

「勘違いするなよ『言葉の重み』など俺にとっては必殺技でもなければ真骨頂でもない、あんなものは行橋が面白がって勝手に言うてるだけに過ぎない、せいせい圧政が通じんのならくま暴政を振るうまで！女を屈服させるのに荒っぽい手段を取りたくはないが、ま言葉が成立しない以上それもやむなしだ」

ファラオは会長ちゃんに向かって手を伸ばす

そこに善吉ちゃんが会長ちゃんの前にかばうように割って入る

「何が話し合いだこの王野郎！お前の言葉は全部ただの命令じゃねーか！お前なんかめだかちゃんに指一本触らせねーよ！！」

さっすが善吉ちゃんかいちよつちゃん女の子を守るためならなんだってするのね

(ル〇ンの真似)

ん？そんなこと思ってる間に話が進んでる……

「まったく無粋な男だよヒトキチ、お前は一体黒神の何なのだ？踏み潰されんうちに俺の王道みちからどくがよい」

「うるせえ！俺の名前は人吉善吉！黒神めだかの幼なじみだ！！」
善吉ちゃんがそう大声で言いながらフアラオを蹴っ飛ばす、そのま
まフアラオは転落

「そんなところから落下するタマじゃねえだろとつと登ってこい！
お前が俺の名前を覚えるまで蹴り続けてやるぜ！！」

返事はない・・・

ま、まさか善吉ちゃんが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・人吉くん、こんな高い場所で暴れちゃダメだよ」

『GYAAA！人吉さん、人殺しー！！！』

「おっ・・・おまえら！ここに来てお前らが普通のこと言うなよ！
！呼び方もよそよしい！！」

だって今完全にバトルパート突入な空気だったじゃん！おい！大丈夫
夫か都城先輩　　！！」

？どした？人吉さん・・・なんか驚いてるけど・・・

第32話 「ちなみにかよ」(後書き)

なが長いので一旦終わりです・・・

どつでもいいけどヒトキチって変換すると人吉にできるんですよ
・

第33話 「嘘ではないよ」(前書き)

あらすじ「善吉・・・いや人吉さんが・・・」

の名前は結局自分の考えたのにしました

第33話 「嘘ではないよ」

修行してボロボロなのに時計塔の屋上に連れてこられてめんどろな話してる白水弓彦（しみずゆまひこ）だよ

しかも・・・今・・・今・・・人吉さんが人を・・・

『殺めてしまっただあー！！！！』

「うるせえー！呼び方戻せ！！」

『だって今善吉ちゃんがファラオを蹴り落として・・・』

「よく見る！！」

そう言われるがまま善吉ちゃんが見てるファラオを落としたところを見ると

え？は？へ？ファラオ・・・なんで壁に立ってるの？

「なるほどいい蹴りだ避ける気にならなかったよヒトキチ、しかし愚民（イマムル）ごときが王（おれ）の身を案じるなど無礼であるぞ」

『いやいやいや避けるよ』

「いや彦・・・そこじゃない」

「言ったはずだな地球は俺にとって小さ過ぎる、地球の重力では偉大なる俺を縛る事はできないのだ！というのは勿論冗談であり、こんなものは足の握力で壁にしがみつき、腹筋で上体を起こしているだけに過ぎない、訓練すれば誰でも出来る、『十三組（サーティーンパーティ）の十三人』の中には天井を歩ける馬鹿もいるくらいだ」

『フアラオ!』

「なんだ偉大なる俺の言葉を遮るとは無礼なやつだ」

『 を知っていますか?』

「ああ奴か・・・面白い異常だよ」
アブノーマル

「彦だれだその って・・・」

『黙ってて善吉ちゃん』

「う・・・」

『その子は今どうしてますか?』

「奴は『サーティンパーティ十三組の十三人』に入ったよ」

『!?!?!?』

う・・・嘘だろ!?!?!?!?!くっ!

俺は立ち上がり「ハートインクルス半身半技」を使い足を強化し走る

壁を

「ひ、彦!?!どうした!?!」

『悪い会長ちゃん!善吉ちゃん!用が出来た!』

そのまま俺は壁を走り下りて行く

そして俺が着いたのは・・・

理事長室だ

そして理事長室のドアを思いきり開け
ソファに座ってる理事長に近づく

そして

胸倉を掴み大声で

『 ちゃんに何をした!?!?』

「な、なんですか!?!いきなり!」

『 とぼけるな!?!』

「あひゃひゃ何必死になつてんのーうざいよ」

右を見ると袖ちゃんが食事してる

『袖ちゃん……』

「　　さんのことですか？彼女は自らフランスコ計画に参加したのですよ！」

『嘘を言うなめ』

【嘘ではないよ彦くん】

理事長室のドアから一歩一歩近づいてくる制服を着てる女の子その子は……

『!!!!!!……なんで……なんで

いせ！

喜屋武唯!!!!!!なんでこの世界に!!!!?』

名前　喜屋武唯^{きやんただ}。

性別　女。

献体名『不明』。

備考　白水弓彦の親友、異世界の人間。

第33話 「嘘ではないよ」(後書き)

なんかめだかつぽい終わり方・・・

第34話 「そつこなくちゃね」(前書き)

あらすじ「シリアスマード」

結構短いです

第34話 「そうこなくちゃね」

『なんでいるんだ！？唯ちゃん！』

【さあーね】

・・・違う・・・

俺の知ってる唯ちゃんじゃない
まるで別人だ

「あひゃひゃ喜屋武一彦」

『・・・何袖ちゃん・・・』

【何？】

「2人ってどういう関係？」

『【親友】』

「あひゃ早い早い」

俺のことはちゃんと認識してる・・・
記憶とかもあるみたいだ・・・

じゃあなんでこんなに変わってる！？

【理事長・・・】

「な、なんですか？」

【私、下に戻ります】

「わかりました、どうぞ」

『お、おい待てよ！唯ちゃん』

【私と話したかったら主人公達めだかと来て】

冷たい目で唯ちゃんは言う

『く……』

俺は血が出るほど強く拳を握る

『……何があつたかよく分からないけど……わかつた……』

必ず！行ってやる！！待っててくれ！！！！』

【そこなくちゃね】

唯ちゃんはフツと笑いながら答える

唯ちゃんと俺は理事長室から出て逆方向に進んでいった
そして俺は生徒会室に向かう

（生徒会室）

俺は生徒会室のドアを開ける

会長ちゃんと善吉ちゃんがいると思つたからだ

.....

マンガ風に擬音で説明すると

ガラーン・・・だ

ん？

俺は会長ちゃんの座る机に目をやるとメモがあった

なにになに？

『彦、私達はフラスコ計画をつぶすために時計台の地下に向かう貴様はいつもどおり授業を受けてくれ』・・・なるほど・・・悪いがそれは守れねーな・・・』

「パトインクリス半身半技」を使い俺は時計台の方へ向かう・・・

あの手紙・・・かいたの誰か丸分かりだな

窓の外から《ぽきゅ》って音がしたし

時計台地下に入るとすぐに破壊されたごっつい扉を見つける

・・・高ちゃんか・・・

そのまま進むとエレベーターらしき扉を見つける

確かこれ地下十三階直通だよな？だったら階段で行くか

階段を降りるとそこは迷宮だった

まあ「無歩」^{ムフウ}使えば関係ない

そして地下2階・・・

第34話 「そつじなくちやね」(後書き)

短くて内容なくて本当すいません
中々ネタが出なくて

第35話 「勸ですよ勸」(前書き)

あらすじ「続シリアスムード」
またまた微妙に短い

第35話 「勸ですよ勸」

箱庭学園時計台地下二階

『日本庭園？』

そうまるで今見てる景色は広い庭みたいだ
なんかあのお見合いとかで来そうな・・・

ん？あれは・・・

『善吉ちゃん、会長ちゃん、高ちゃん、もがちゃん！？』

「あ！彦！？なんでここに！？」

『用ができてね』

「そうか」

『ところでこれは何？なんで室内に屋外が？』

「ふむ、これは一種のビオトープだな、ほれ天井をってみろちゃんと屋内だぞ」

そう言われると会長ちゃんを除き全員が天井をよく見る

『なるほど〜色んなのを調節して屋外を再現してる・・・って所かな？』

「・・・それがわかっているなら、早く後ろの扉を閉めてくれないかな」

声のするほうを見ると宗像先輩が水遣りをしている

「それは気付かなかった、ところで貴様も『十三組の十三人』のメンバーか？」

会長ちゃんが聞く宗像先輩はあっさり答える

「そつだよ三年十三組宗像形だ、理事長から聞いている君達が施設を視察に来た生徒会執行部なんだろう？ だけど見ての通り僕は今作業中で君達の相手をしてる暇はないんだ、悪いけどこのフロアの視察 宗像先輩』なんだい？」

『喜屋武唯はこのフロアにいますか？』

「地下十一階にいるよ、まだ地下十一階は改築中だけどね
まあ僕は争いが嫌いだし『十三組の十三人』サーティンパーティはもう全員揃ったしね」

「ふむそついうことならこの階は素通りさせてもらつとするか」

会長ちゃんが宗像先輩に背を向けると宗像先輩は

剥き出しの刀を会長ちゃんの首目掛けて振り斬る

それを会長ちゃんはギリギリ避けていた
髪が切れたけど・・・

「……………っ!?!」

それを宗像先輩は平然と

「ん？あれね、へえ、避けるんだ、避けないって聞いてたのに」

「「なつ・・・なつ・・・なななつ、なんだこいつうう！？」」

『宗像先輩・・・』

「あれ？お友達は皆驚いてるのに君は驚かないんだね・・・殺したくなる」

『あなたのあれでしょう？殺人犯でしょう？そして異常は殺人衝動だ』

「へえ・・・なんで知ってるんだい？」

『勘ですよ勘』

「お、おい彦！？どういうことだよ！？」

『だから勘だって・・・さてと俺はちよつと先行くな』

「どうしてだ彦」

『さつき話に出た子のところに行かせてもらっ』

「まあ別にいいよ僕はとうせんぼしない、だから殺す」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

仕方ない・・・即・・・逃げる！！

「パーティンクリス半身半技」を使って逃げる！！！！

.....

うん迷った・・・広いここ・・・階段どこ？

よし便利な「無歩」イフラン

よし階段到着！

さっきも思ったんだけど階段長い・・・

地下3階 !!!?

突如俺の体が固まり始める!!!?

なんだ！？まるで時間が止まるような

ピキッ

俺の体が完全に固まる・・・

第35話 「勸ですよ勸」(後書き)

なんか最近微妙だな・・・いろんな意味で

第36話 「がんばって!」 (前書き)

あらすじ「主人公のおふざけが少ない・・・」

第36話 「がんばって!」

「やあ久しぶりだね」

.....

えーと.....ここは教室.....そんで箱庭学園のじゃない
そして教卓の上に髪の毛の長い女が座っている
よーするに.....

『帰る!』

「逃がすと思いかい？」

『いやあああああ—————』

五分後

「落ち着いたかい？」

『久しぶり.....安心院あんしんいんさん』

「どう?世界は変わったかい？」

『!?!あれ?安心院あんしんいんさんでも変わったちゃっつんじゃ?』

詳しくは第11話らへんを見てね

「それが君にあの話をしたせいかわ僕にも変化はないんだよ」

『ふーん……まあ変わったかな……』

「どんな風に？」

『会長ちゃんや善吉ちゃんと昔からの知り合いになったり……』

「大変そうだね……」

『大変です……』

「さて君が何故ここに来たと思う？」

『寝たか死んだ』

「ファイナルアンサー？」

『ファイナルアンサー……』

どこで覚えたんだ……それ……

「残念……!」

『ああ……!……じゃねーよ……!……!』

「え？」

『え?じゃねーよ……!』

「ごめんごめん」

安心院あんしんいんさんは意地の悪い笑いをする

「僕が僕の意味で連れてきたんだよ」

『何故?』

「君の時間が止まったのさ」

『はい?』

どーゆーこと?

「そのまんまの意味さ」

『よくわかりません』

「ようするに誰かのスキルで君の時間が止まったのさ」

『マンガでありがちな時間を止める能力ってことですか?』

「そっいつこと」

『どうやったら戻ります?』

「僕にかかれば簡単なんだけど」

『けど?』

「自分でがんばって!」

肩にポンと手を置かれる

この人殴っていいすかね?

「大丈夫だよこれは他人に触られると戻るんだよ」
『他人・・・』

「おや？めだかちゃんたちが来たみたいだね」

『はい？』

「そろそろ戻るよ・・・じゃあね」

いつもの通り周りの景色が崩れ目が覚めると

「彦!？」

『うおっ!!!?!?』

「」「うわああああ!?!?」「」

なんだ？なんかいきなり声かけられて・・・目が覚めて

「大丈夫かい？弓彦くん？」

『ま、真黒さん？それに会長ちゃん、善吉ちゃん、高ちゃん、もがちゃん・・・』

「びっくりさせやがって・・・」

「まったくだよ」

「階段降りてる時固まって立ち止まってびっくりしたよ・・・」
「貴様は先に行ったはずだ何があった」

『えーと・・・わかんね』

第36話 「がんばって!」 (後書き)

やっぱり短いよなあー

終わり方も微妙・・・

調子悪くなってきたかも・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2602x/>

普通だけど異常で過負荷な俺

2011年11月2日15時13分発行